博　多　X

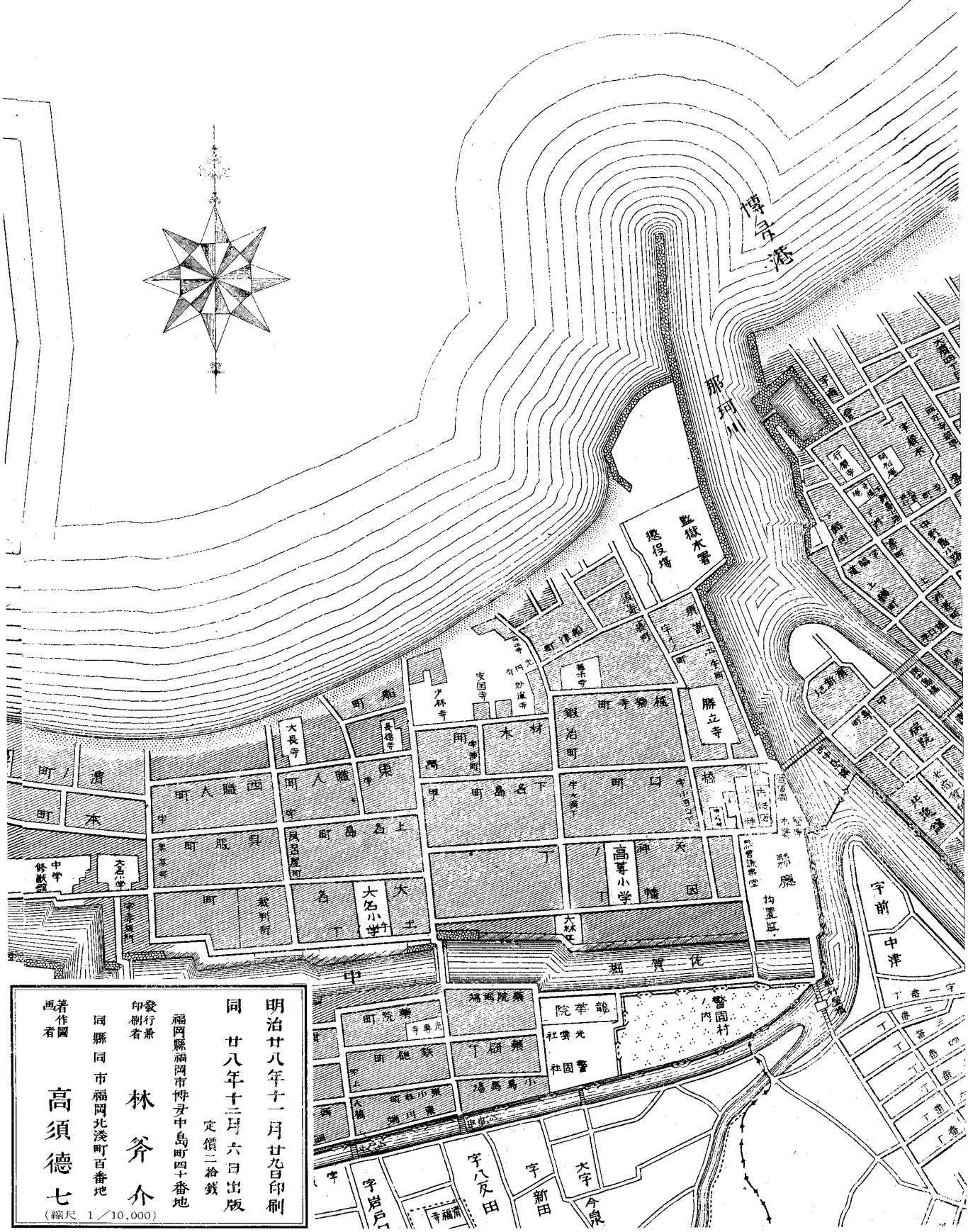
―― 博多遺跡群第31次調査の報告 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第150集

1987

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市明細圖

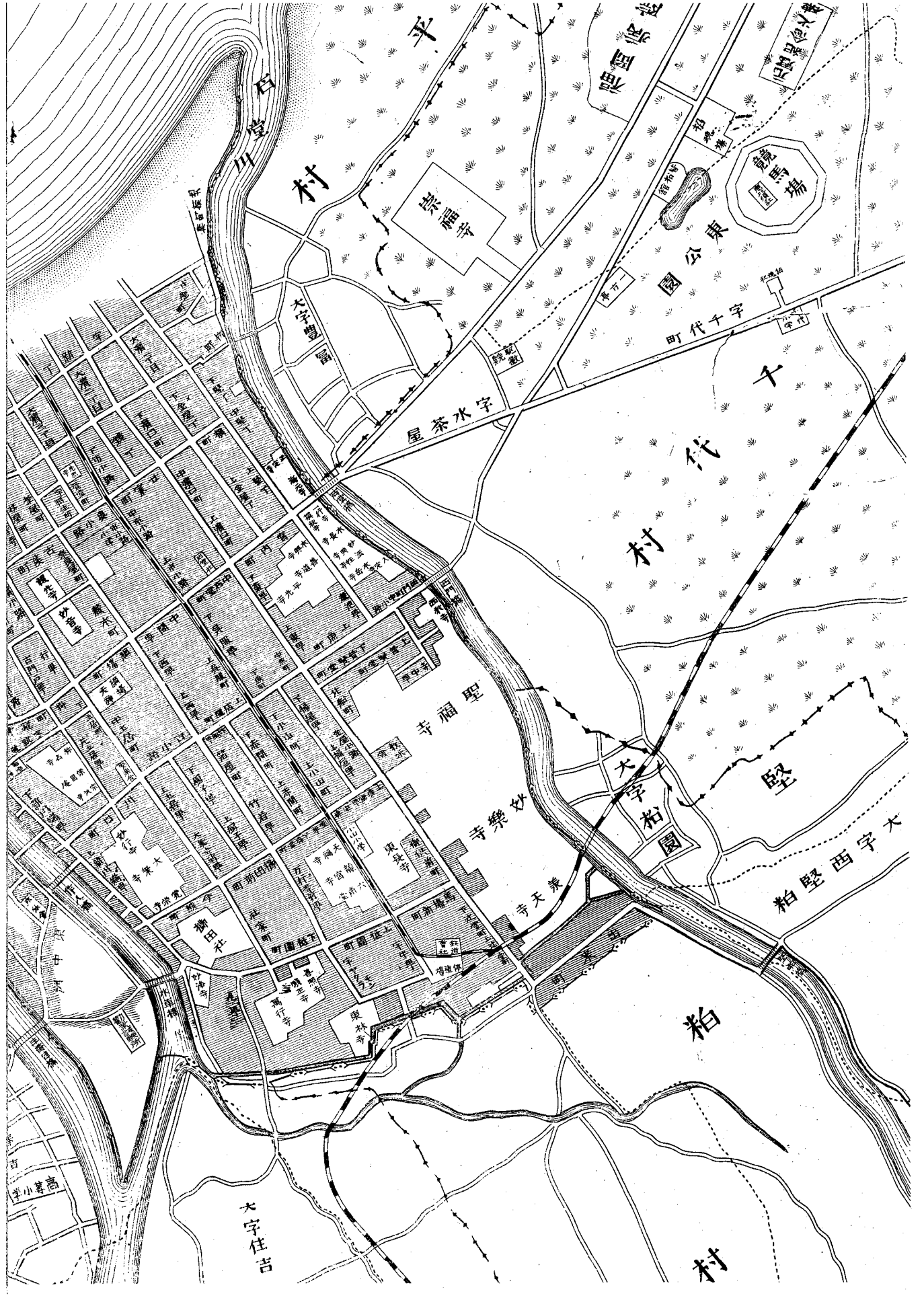


明治廿八年十一月廿九日印刷
同 廿八年十二月六日出版
定價二拾錢

福岡縣福岡市博多中島町四十番地
發行兼印刷者 林斧介

同縣同市福岡北淺町百番地
著作圖画者 高須德七

(縮尺 1／10,000)


平村
崇福寺
大字豊島
東公園
千代村
大字粕園
大字西粕堅
粕堅
大字住吉
聖福寺
妙樂寺
天寧寺
横田社
東林寺
屋茶水字
町代千字
高等小学

The 31th Point of Hakata Sites

博多 X

―― 博多遺跡群第31次調査の報告 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第150集

福岡市域の古代・中世遺跡の分布（縮尺　約1／250,000）

遺跡略号　HKT

遺跡調査番号　8606

1987

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市教育委員会では、博多周辺の再開発に伴う埋蔵文化財の調査を続けています。

このたびの調査区は、隣接地の調査で明らかとなった前方後円墳の延長上に当たるため、古墳関係の遺構や遺物の出土が予想されました。発掘調査の結果、中世の生活遺構下で前方部の葺石の一部が確認され、また、古墳に伴う埴輪も出土し、予想以上の成果をあげることができました。

この報告書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となり、研究資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

また、調査にあたって、快くご協力を賜わった地権者、工事関係者各位に深甚なる謝意を表します。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が1986年度に実施した博多遺跡群第31次調査の報告である。

2．本報告書を福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集とする。

3．本書に用いた地図は、福岡市都市計画図を1/4,000に縮図、統一した文化財分布地図をもとに作成したもの（Fig. 5）と福岡市土木局が計画した道路台帳平面図を1/1,000に縮尺したもの（Fig. 6）である。

4．本書に用いた地図の方位は、およそ真北を指すものである。

5．本報告書に関わる遺物、記録類(写真・スライド・図面)は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理されるので活用されたい。

6．見返し表に用いた福岡市明細図は、福岡市立歴史資料館蔵品で、高田茂廣氏の御配慮により拝借したものに一部手を加えて掲載した。

7．見返し裏に用いた博多眺瞰図は、石瀧豊美氏より拝借したものである。

8．題字は、筑紫　豊先生の揮毫による。

9．遺構の実測は、加藤良彦・常松幹雄・池田祐司・浅倉弥生が主に行い、永淵昭子が製図を行った。

10．遺物の実測および製図は、池田・荻村昇二・永淵・常松が行った。

11．写真撮影は調査区を加藤・常松が行い、遺物写真を常松が行った。

12．表の作成に当たっては、田中克子氏の助言をもとに、主に細井晴美・小宮歩美・北山陽子が種分けを行った。

13．本書の執筆は常松が行った。

14．本書の編集は、力武卓治の協力を得て、加藤・永淵・常松が行った。

目　　次

Ⅰ．博多遺跡群31次調査に関する文化財概要

第１章　調査の経緯……2

第２章　組織の構成……3

Ⅱ．博多遺跡群31次の調査

第１章　遺跡の位置と環境……6

第２章　博多遺跡群31次調査の概要……10

第３章　歴史時代の遺構と遺物……11

第４章　古墳時代の遺構と遺物など……20

第５章　結　　語……26

遺構と遺物一覧……28

Summary ……36

博多遺跡群

Ⅰ．31次調査に関する文化財概要

Fig. 1　写真撮影のための清掃作業(西側上空より)

第１章　調査の経緯

1986年３月３日、株式会社アイチより博多区御供所でのビル建設計画が埋蔵文化財課に出された。この箇所の東南部は前年に発掘調査を行った結果、中世の生活遺構やその下面から前方後円墳の葺石が確認されていた。そのため、建設によって失われる遺構群の処置について協議を重ねた後、本調査を実施することで両者間に調査契約が整い、1986年５月22日より第１次掘削に立会う運びとなった。

博多遺跡群31次調査概要

調 査 地 地 籍……福岡市博多区御供所町65・66番地

開　発　面　積……190m²

調査対象面積……190m²

調査実施面積……約160m²

調　査　期　間……1986年５月22日（１次掘削開始）

1986年５月26日～1986年７月15日（延45日間）

なお、発掘調査にあたっては、施主である「アイチ」の担当者、浦貞人氏に格別の御協力を戴いたほか、現場作業においては、株式会社「中野組」福岡支店、楠本正利氏に諸々の御配慮を賜わることができた。記して感謝致します。

Fig. 2　調査区にそびえるビル（左手前・31次：右奥・28次）

第２章　組織の構成

博多遺跡群31次調査は、左記のとおり発掘調査が行われ、その後、出土遺物の復元、遺構の図面や写真の整理を行った。発掘調査に伴う組織の構成は以下のとおりである。

調査委託　株式会社　アイチ（東京都新宿区四谷４丁目２番２号）
　　代表取締役　森下安道

調査主体　福岡市教育委員会
　　教 育 長　佐藤善郎
　　埋蔵文化財課課長　柳田純孝
　　埋蔵文化財課第２係長　飛高憲雄
　　庶務担当　松延好文
　　調査担当　加藤良彦・常松幹雄

また、現地における発掘調査ならびに遺物整理においては、多くの方々の協力を得た。

調査補助　池田祐司（九州大学文学部考古学専攻学生）
整理補助　永淵昭子（熊本大学文学部考古学専攻卒）
〃　小川泰樹（明治大学文学部考古学専攻学生）
〃　荻村昇二（　〃　）

調査・整理作業に従事いただいた皆さん
　　浅倉弥生・安陪麻子・江崎清子・衛藤富子・奥田幸子
　　小野寺幸子・窪田　慧・栗木和子・黒田和生・古賀美恵子
　　渋谷友代・高木正代・谷　吉美・津川真千代・徳重昌美
　　細井晴美・前田直子・松田純子・百武義隆・森田実智
　　北山陽子・小宮歩美・汐崎美紀・陳　雅文・宮崎由美子
　　（西南学院大学文学部学生）

調査中、木村幾多郎氏(佐賀大学講師)には、土坑より出土した馬歯を鑑定していただいた。また、佐々木哲哉先生・高田茂廣先生(福岡市立歴史資料館)には、博多の町割について種々の御教示を賜わった。文末であるが、厚く御礼申し上げる次第である。

博多遺跡群

II. 31 次 の 調 査

Fig. 3　発掘作業風景(北側より)

第１章　遺跡の位置と環境

再開発がすすむ博多の町は、主要道路に沿って様変わりを続けている。建並ぶ近代的ビル群を横目に、一歩裏通りへ足を踏み入れると、戦災を逃れた木造家屋が残っていたりして、古い町割の面影に、なぜかほっとすることもある。昭和41年に実施された市の町界町名整理事業によって、旧来の道路に面する両側の家は、同じ町内、同じ流れという博多独特の町の構成は失われてしまい、今日では、山笠やどんたく松囃子にその一端を伺えるほどとなった。

現存する博多古図の多くは18世紀以後の作成とされている。したがって、それらは古代から中世の地形を忠実に写しとったものとは言いがたい。中山平次郎は『古代乃博多』のなかで、「博多古図なるものは、『筑前国続風土記』に依て啓発された旧地形に関する考案の上に、諸事蹟に対する自家の見解を記入したもの」と述べている[(1)]。

今回の報告では、現地形と旧地形を比較する手段として、まず道路台帳平面図にある標高をもとに博多の町に等高線を入れることにした(Fig. 5)。

これまでの博多古図に共通しているのは、博多の町が入海を挾んで北側の息浜(沖ノ浜)と南側の櫛田神社や聖福寺・承天寺のある一帯(博多浜)に分かれていることである。また、『石城志』の古図では、比恵川が石堂川と流れを一にしているのだが、『伏敵編』や住吉神社の絵馬によると、比恵川は承天寺の南側を西に、冷泉津に注いでいるなど、異なっている部分もある。

では現在の等高線[(2)]を見てみることにしよう。５ｍの等高線は、昭和通りを中心に東西に長いブロックと国道202号線の南に不定形な２つの広がりを見ることができる。さらに４ｍの等高線は５ｍの等高線をとり囲みながら、202号線と博多駅前通りが交嗟する付近(呉服町交差点)で重なり合う。

この４ｍと５ｍの等高線で囲まれた北側の一帯は、旧来の町割を併せて考えると、古図にある息浜の名残りと考えることができるようだ。旧地形が現在の等高線に生きている可能性が強まった。

古図によると、息浜と博多浜をつなぐ４ｍの等高線の付近(呉服町交差点)は、何れも入海となっており、より西側にかけられた橋によって結ばれていたことになっている。ところが地下鉄関係の調査では、この地点に杭・板・石で土留された南北方向の側溝や、それに直交する溝や木棺墓、井戸も検出されている。ここの遺構最下面の時期は、青磁が殆どなく白磁のみが卓越する11世紀後半から12世紀初頭に比定されるという[(3)]。平清盛が大宰大弐となったのは保元２年(1157)のことだが、この時期には少なくとも息浜と博多浜は地続きになっていたのである。

博多浜のなかにも、石堂川沿いには筥崎宮を氏神とする町々がある。これは比恵川の流れをかえて石堂川とする以前からの慣習とも言われている[(4)]。ともかく比恵川は、かって承天寺の南を通り冷泉津へ流れていたことはほぼ間違いないようである。明治13年の地図にも、溝状の流れが記されており、若八幡の南側や住吉１丁目にある妙に湾曲する道路にその形跡を止めているようだ。また、この溝は元亀のはじめ(1570年頃)大友氏の武将、臼杵安房守鑑賡(あきつぐ)が博多防衛

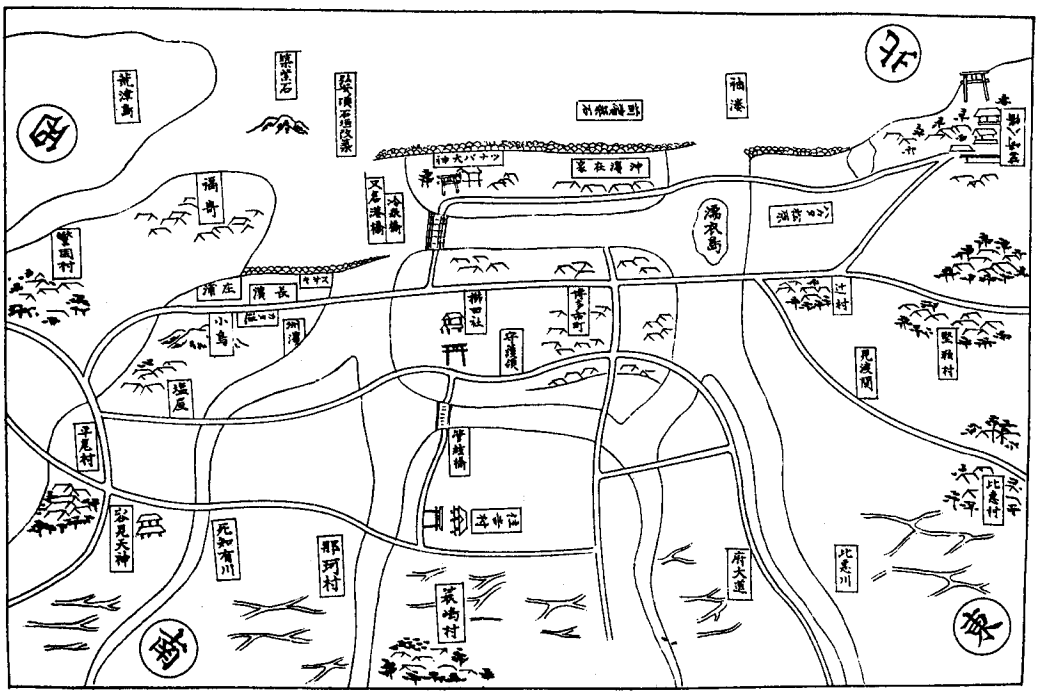


Fig. 4　「石城志」所載の博多古図

のために掘らせたという房州堀[5]にも大筋で重なるようである。

そして冷泉津の位置については、現在の櫛田神社の西の４ｍと３ｍの間の等高線を岸のラインと推定して、冷泉小学校、冷泉公園を横切って、店屋町、綱場町に入り込む範囲が読みとれるのではないだろうか。

以上、博多の現況図から旧地形の推定を試みたわけだが、その結果、31次調査区の範囲は、いわゆる博多浜の南東部に位置した旧町割の南界に近い部分として捉えられるようである。

また、博多の旧地形について、情報、御意見をお持ちの方は御教示願えればと思う。

（註）

(1)　中山平次郎著、岡崎敬　校閲　「博多古図」『古代の博多』　九州大学出版会　1984年

(2)　高さの基準は東京湾の平均海面（Ｔ・Ｐ）である。

(3)　折尾学、池崎譲二、森本朝子　「中世の博多―発掘調査の成果から―」『古代の博多』　九州大学出版会　1984年

(4)　井上精三　「博多と産土神」『福岡・博多の町名誌』　福岡市都市計画局　1982年
佐々木哲哉先生の御教示による。

(5)　吉永正春　「房州堀と矢倉門」　ふくおか歴史散歩　第三巻　1987年

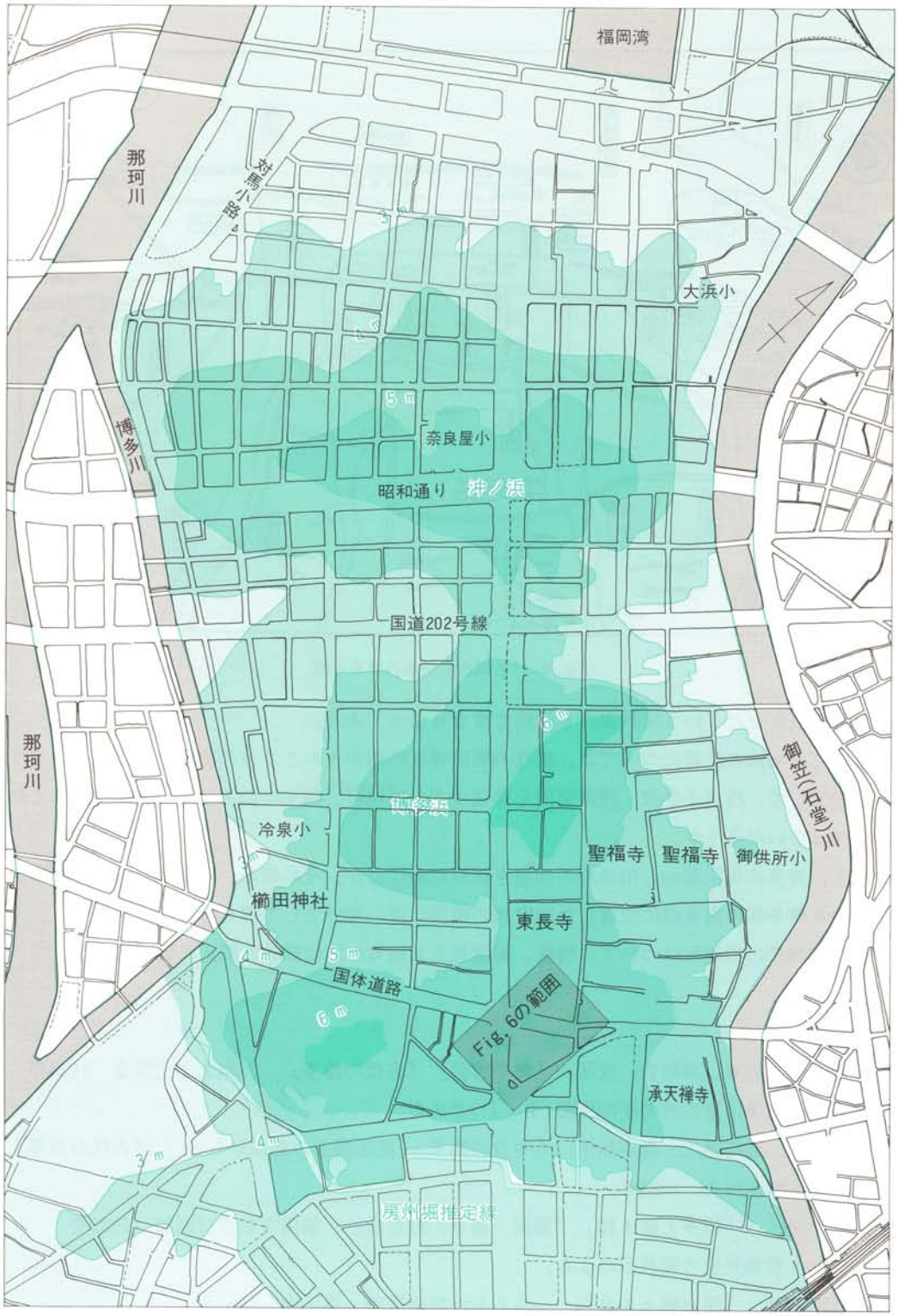


Fig. 5　沖ノ浜・博多浜の地形復元案(縮尺 約1／10,000)

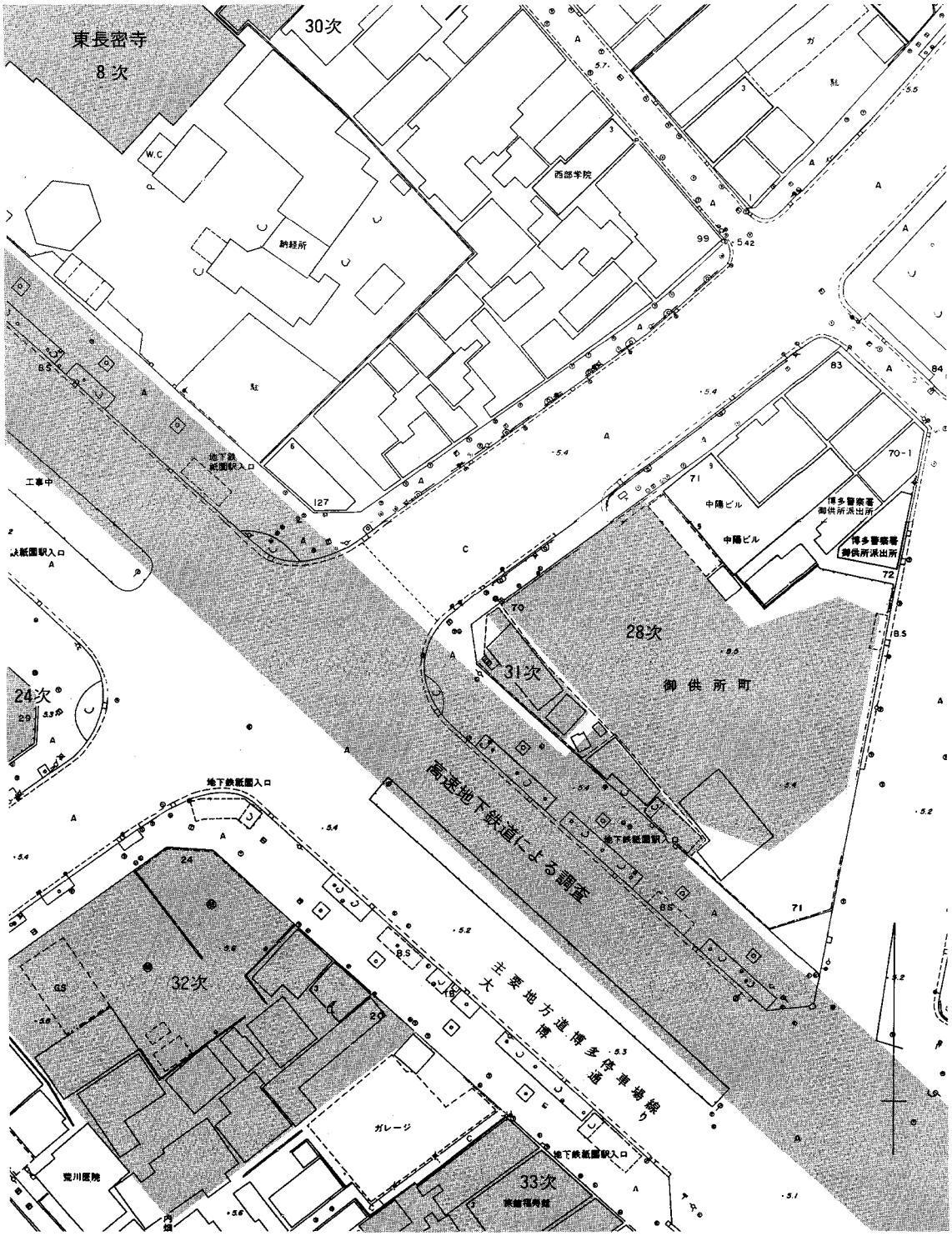


Fig. 6　博多遺跡群31次調査区の位置(縮尺　1／1,000)

第２章　博多遺跡群31次調査の概要

今回の調査目的の一つは、隣接する28次調査(85年度)で見つかった前方後円墳の延長を探ることである。160m²ほどで発掘調査としては狭い範囲だが、西南北方向にシートパイル、東側に掘り下げのレベルに並行して矢板を打ち込むことで、調査面積を確保した。また、排土置場がないことも問題だったが、パワーショベルのついたダンプでどうにか切り抜けることができた。ただし、排土の総量は100m²を超えるもので、遺構掘り下げの日には、搬出に３台以上も必要だった。

40日間の調査は、黒褐色の面(上面)と、黄色砂層の面(下面)を中心に行うことにした。上面は、中世の遺構、下面は、古墳時代の遺構を捜すことが目標である。

上面は、遺構の切合が繁雑で、複数の土坑に切られた部分が不定形に残ることになる。その部分をベルトを残して掘り下げると、遺物はかなり出土するわけで、こういった不定形な部分が性格不明遺構となっていく。これは遺構が密集している博多の調査にはよくあることなのだが、井戸・溝・墓を除くと、性格の解らない遺構が多い。

遺構配置は、Fig. ８に示すとおりである。グリットは、調査区の形にあわせて一辺３ｍで設定した。アルファベットと数字が交わる北東隅がグリットの地区名となっている。大ぶりの掘り込みにはＳＫ番号を通しでつけ、小さな掘り込みには各グリットでＰ番号をつけて、遺物の取り上げを行った。また、溝はＳＤで示した。

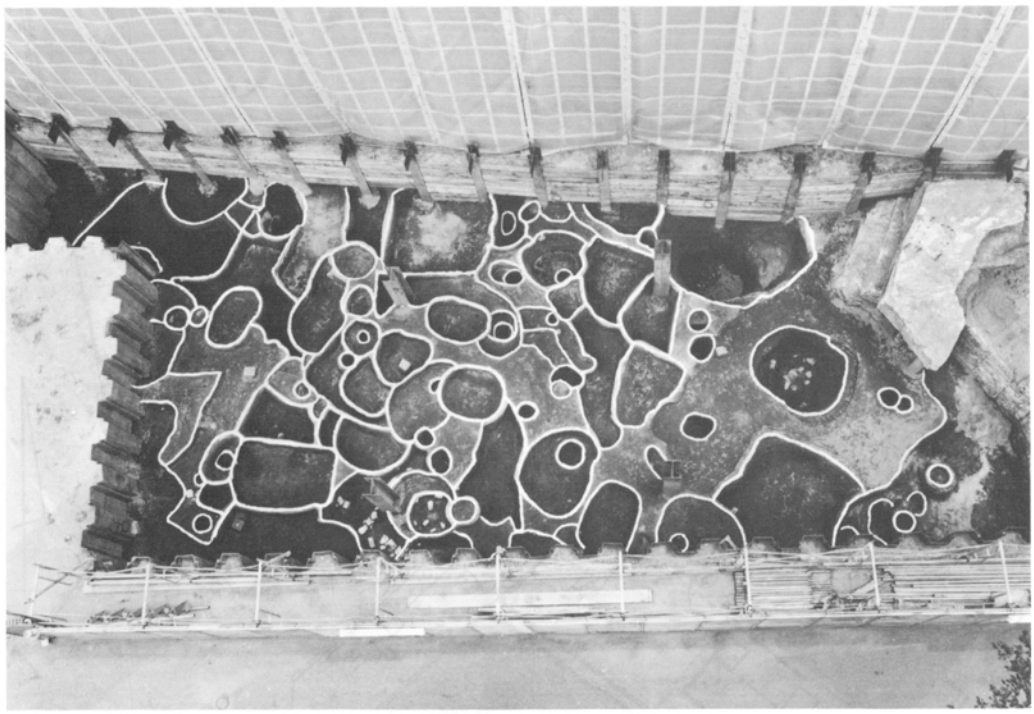
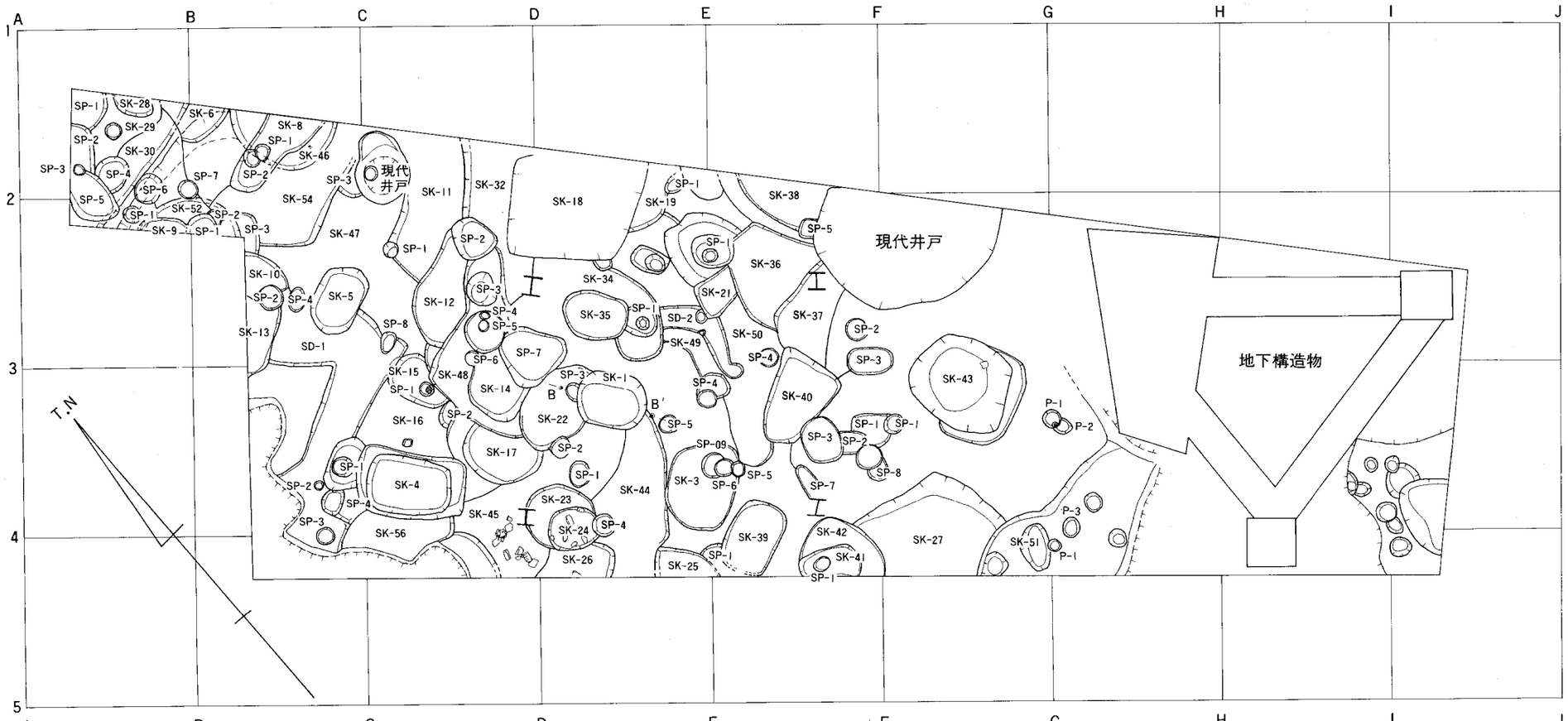


Fig. 7　遺構検出状況Ｉ(上面)西側上空より



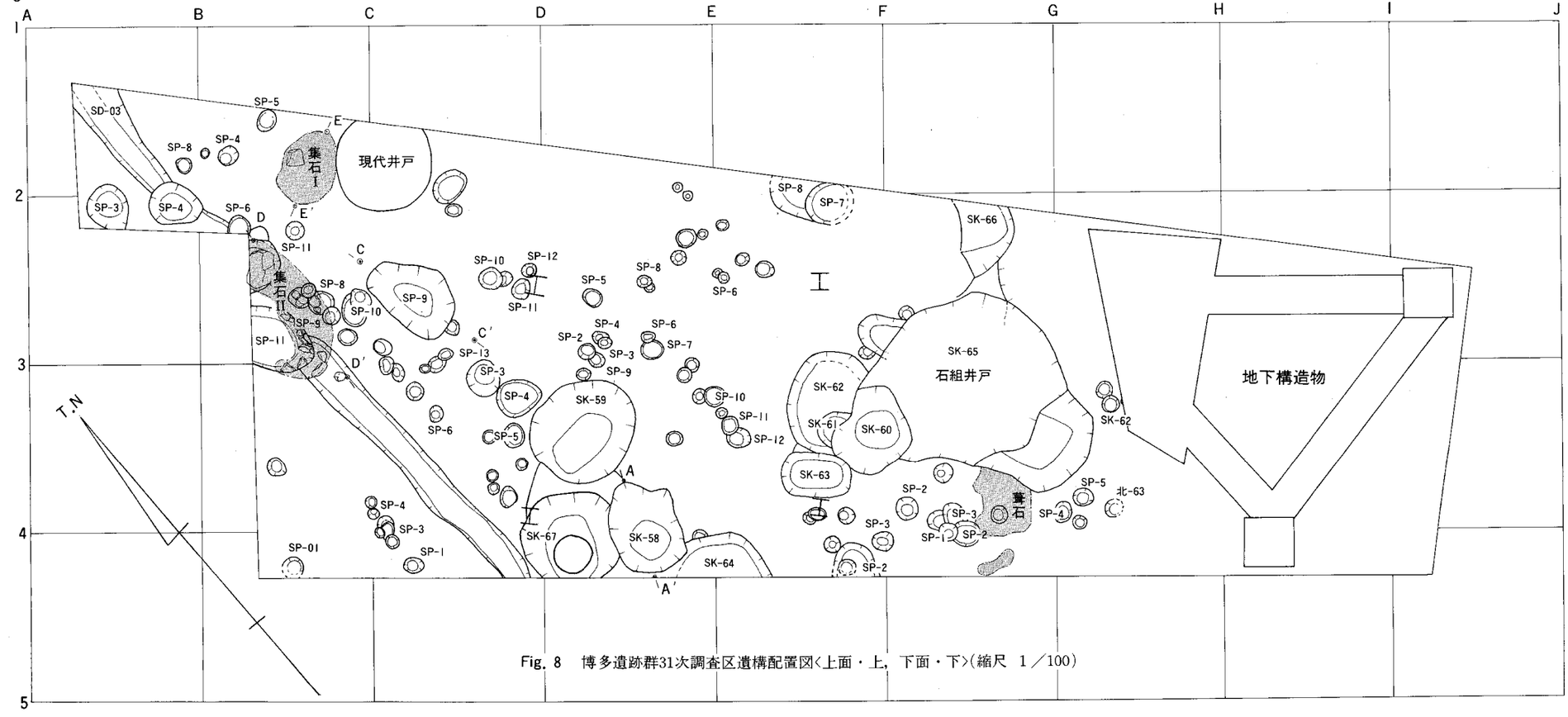


Fig. 8　博多遺跡群31次調査区遺構配置図〈上面・上，下面・下〉(縮尺 1／100)

第３章　歴史時代の遺構と遺物

古代・中世の遺構は調査の上面から下面に及んで見つかった。遺構の種類は、石組井戸（ＳＫ－65）や土坑、溝、柱穴状のピットで、性格を規定できるのは、井戸に限られている。

主だった土坑と出土遺物には、石帯の丸鞆を出土した１号土坑（ＳＫ－01）、馬１頭が埋まっていたと思われる58号土坑（ＳＫ－58）、完形に近い青磁碗が埋まっていた土坑（Ｂ－２区～ＳＰ－09）などがある。

３号溝は、砂層に掘り込んだ断面が台形状の直線的な溝である。実は、この溝の方位は、磁北の南北に全く一致している。出土遺物は、口禿の白磁碗、青磁の細片１に糸切り底の土師皿など微量である。

これまでの調査で、博多の町割りの変遷は、①12世紀、②15世紀、③16世紀の三段階に整理できることが明らかとなった。12世紀の町割りでは、道路、溝は、ほぼ東西、南北にはしっている。15世紀は、現在の通りよりも約15度西に傾いている。そして16世紀の町割りは、豊臣秀吉が天正15（1587）年に着手した「大閣町割り」を原形にしており、現在の区画とほとんど同じである。

話を３号溝に戻すと、中世の遺構は、溝の東側に濃厚で、西側に薄いことから、この溝は、道路の側溝、あるいは雨落ち溝で、生活面は溝の東側だったと推測したい。

今回の調査は、約 160m²ほどの狭い面積ではあったが、井戸や土坑群に加え、町割りに関連のある溝を発見できたことは、大きな成果だったといえよう。

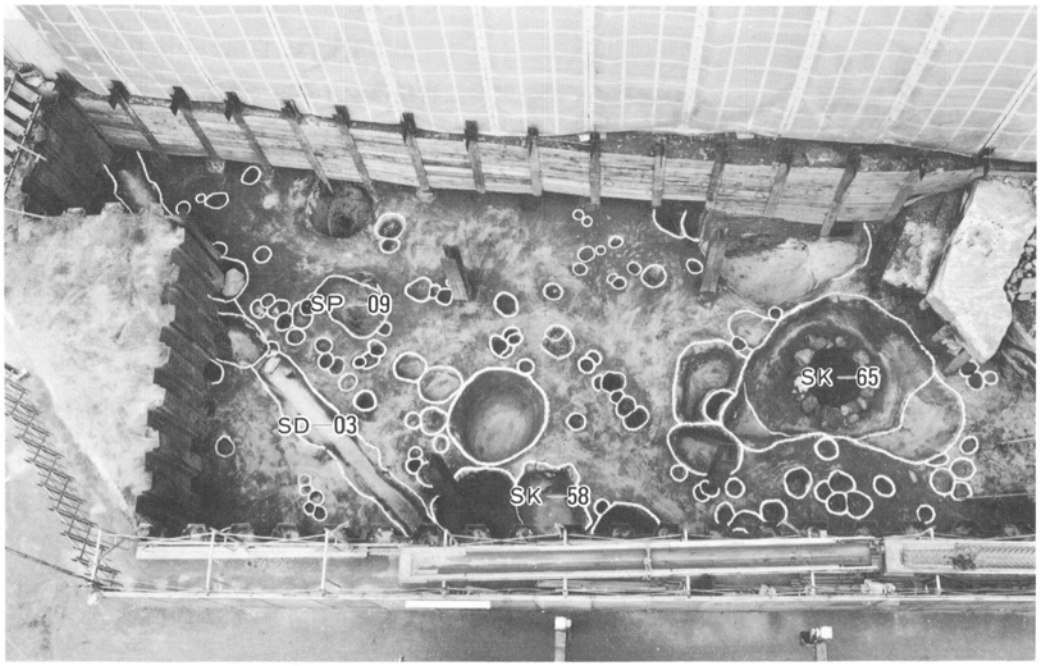


Fig. 9　遺構検出状況II（下面）西側上空より

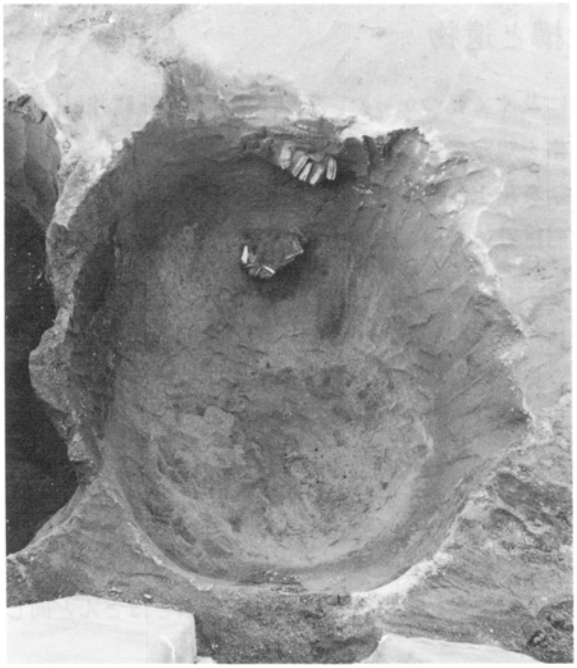


Fig. 10　58号土坑(ＳＫ－58)全景(西より)
馬歯の近景(上右)

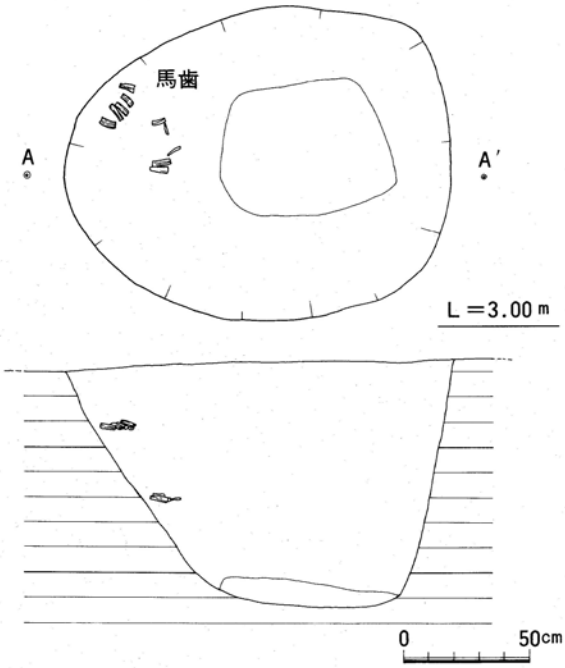


Fig. 11　58号土坑(ＳＫ－58)遺構実測図(縮尺　1／30)

58号土坑(ＳＫ－58)と出土遺物

ＳＫ－58は、長軸が 1.5mほどの長楕円形の土坑である。砂層に約１ｍ掘り込んであったが、本来はもう少し深かったと思われる。底から70cmくらいの所で、動物の歯が並んで発見された。木村幾多郎氏の鑑定によると、この歯は、成年に達した馬の歯で、出土位置などからすると馬１頭が埋まっていた可能性がつよいということだった。

出土遺物は、白磁が主流を占めており、青磁はマイナーである。

土師皿は、糸切り底で、ヘラ切り底のタイプはない。

陶器は、２点図化したが、14の釉は緑がかったこげ茶色で、胎土は赤茶色である。15の壺の釉も緑がかったこげ茶色で、胎土は茶色がかった灰色である。

16の瓦は、内面に布目痕、外面は縄目によるたたきのあとがあり、一方の縁に近い部分に轆轤成形時のナデが見られる。

馬の骨は一切出土しておらず、特殊遺物もないことから、祭祀との関連は不明である。

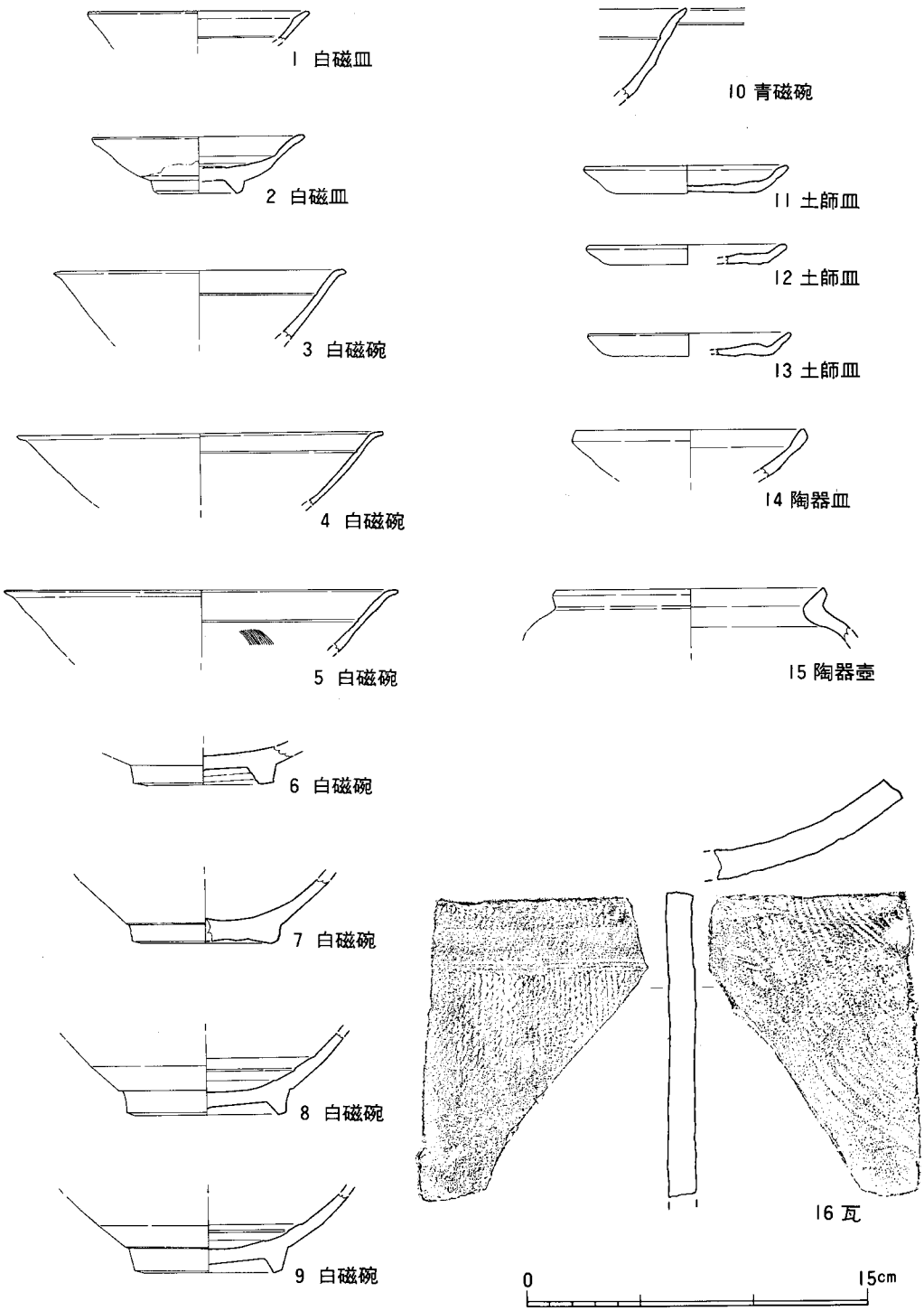


Fig. 12　58号土坑（ＳＫ－58）出土遺物実測図（縮尺１／３）

石組井戸(ＳＫ－65)と出土遺物

当初の遺構確認の段階では、擂鉢状の土坑という感じだったが、下面へ掘り下げを行う時点で、悠に一抱えはある礫が現われ、それらが円形に並んでいたことから石組井戸と判断した。埋土が砂質で壊れ易かったことから、断面観察を諦めて掘り下げを行うと、湧水点の付近で井筒に用いた桶が見つかった。元々は上面まで桶が合わさっていた可能性もあるようである。

出土遺物(Fig. 15)は、井筒と堀り込みが混じってしまったが、明代の染付(１)が廃棄時の一つの目安になると思う。２は龍泉窯系の青磁碗、３は透明釉のかかった磁器の皿で、高台の裾付近だけは釉を削り取っている。５は肩部に巴形のスタンプのある土鍋である。小片で図化していないが、玉縁の発達した白磁碗や糸切底の土師皿なども出土しているので、使用期間は鎌倉～室町と推定したい。７の鉢は黒褐釉、８の壺は灰オリーブ色の釉である。６は図化した

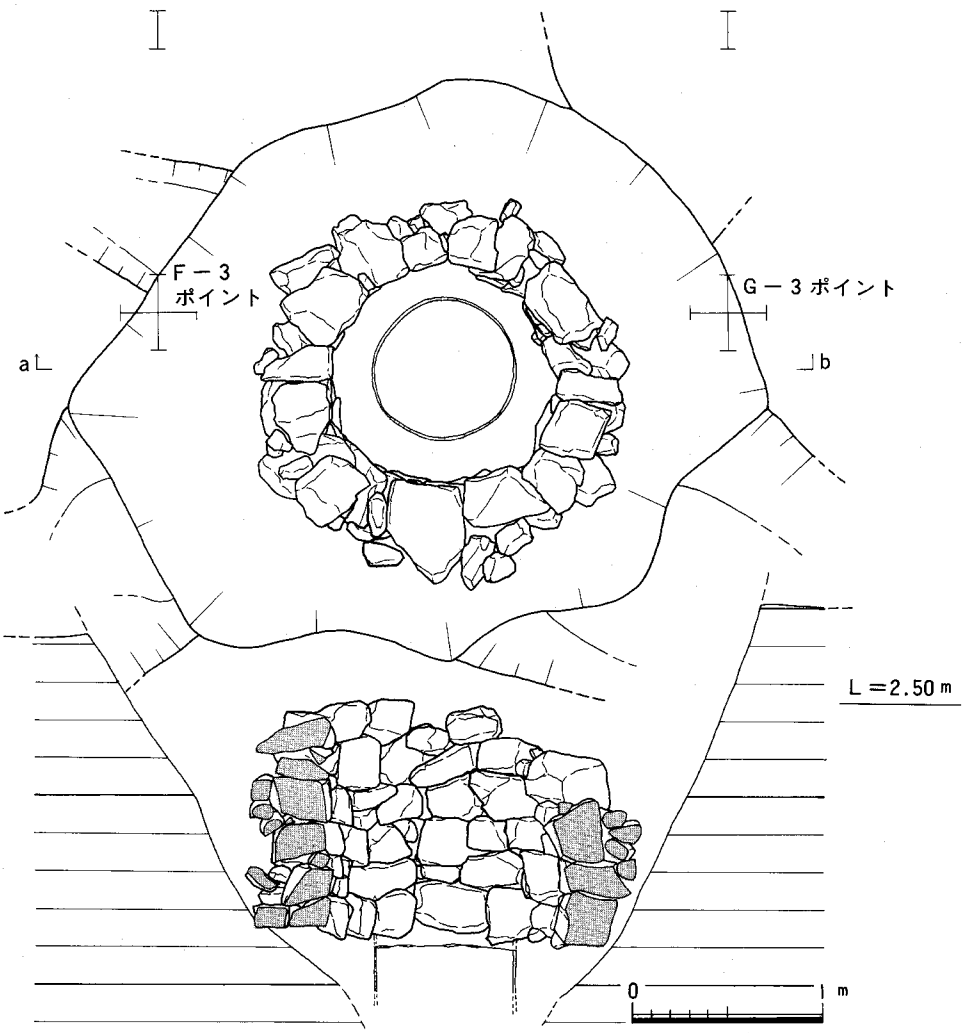


Fig. 13　石組井戸(ＳＫ－65)遺構実測図(縮尺　1／40)

面の胎土が精良で、焼きも良いことから、下底面の辺が数ミリ大きくなる塼であったと思われる。他に同様の破片ふたつも投げ込まれていたが、何れの面にも極立った磨耗は見られない。ここでは、とりあえず塼としたが、周辺での出土例を検討したうえで、遺物の性格を明らかにしたいと思う。

Fig. 14　石組井戸全景(西より)

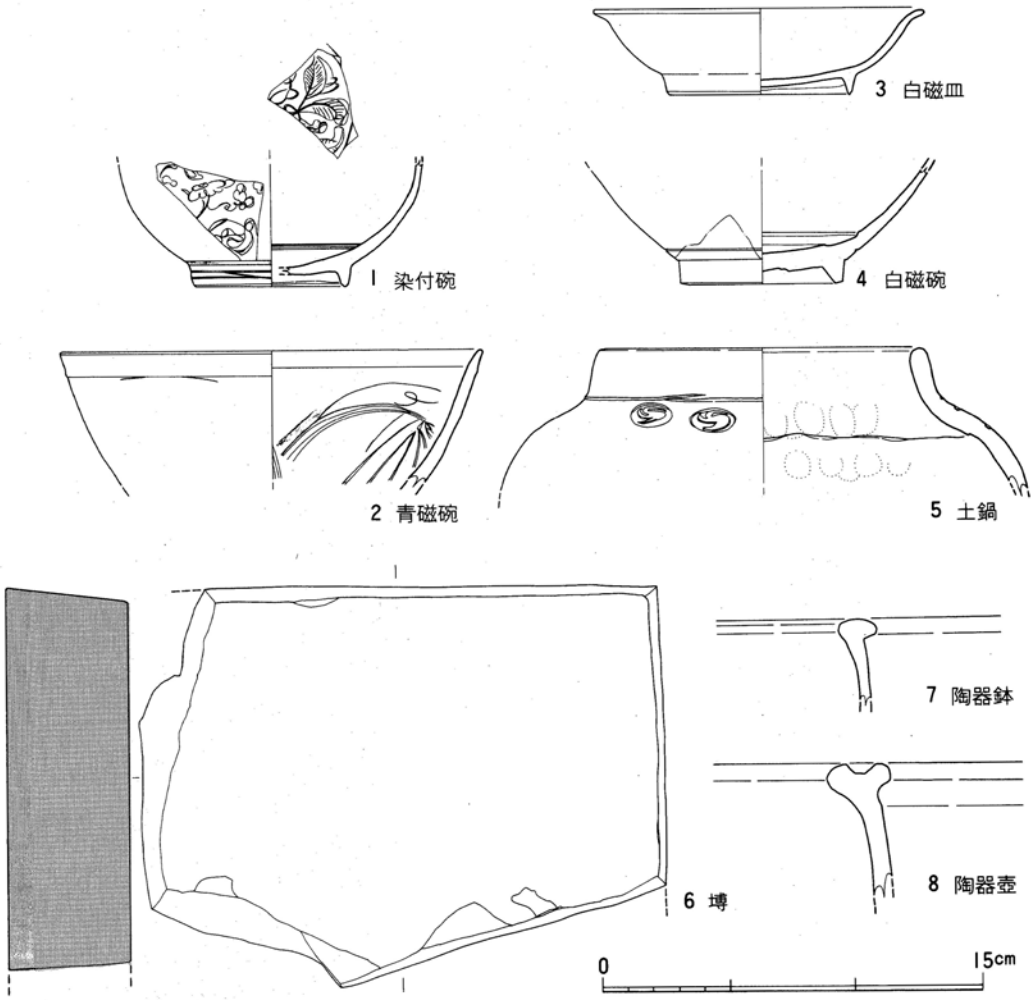


Fig. 15　石組井戸(ＳＫ－65)出土遺物実測図(縮尺　1／3)

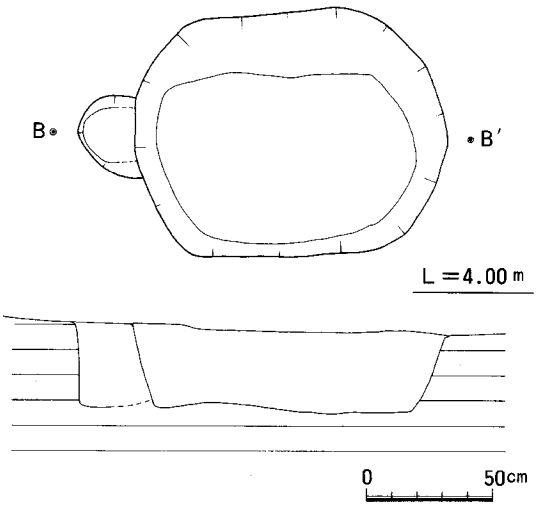
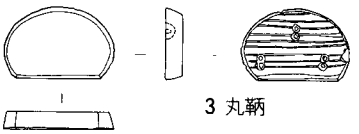


Fig. 16　1号土坑(ＳＫ－01)遺構実測図(縮尺　1／30)



1号土坑(ＳＫ－01)と出土遺物(Fig. 16･17、1～4)

ＳＫ－01は、上面で確認された長楕円形の土坑である。底に近いレベルで石帯の丸鞆(まるとも)が見つかったので、遺構図も掲載した。丸鞆は黒色の石を用いており、表面は丁寧に磨いている。また、裏面には横方向の沈線が不規則な間隔で施され、２個１対の糸通しの穿が３つある。共伴遺物には、刀子(５)や龍泉窯系の青磁碗(６)、白磁碗(７)などがある。一括遺物かどうかは検討の余地がある。

29号土坑(ＳＫ－29)出土遺物(Fig. 17、５・６)

完形の白磁皿が出土した29号土坑は、幾つもの土坑に切られているので、本来の形状などは不明である。共伴遺物は図示しなかったが、玉縁の発達した白磁碗や龍泉窯や同安窯系の青磁などがあげられる。

Ｂ－2区1号ピット(ＳＰ－01)出土遺物(Fig. 17、７)

矢板に切られた円形ピットから出土した青磁碗である。完形なので図示することにした。単独出度の遺物である。

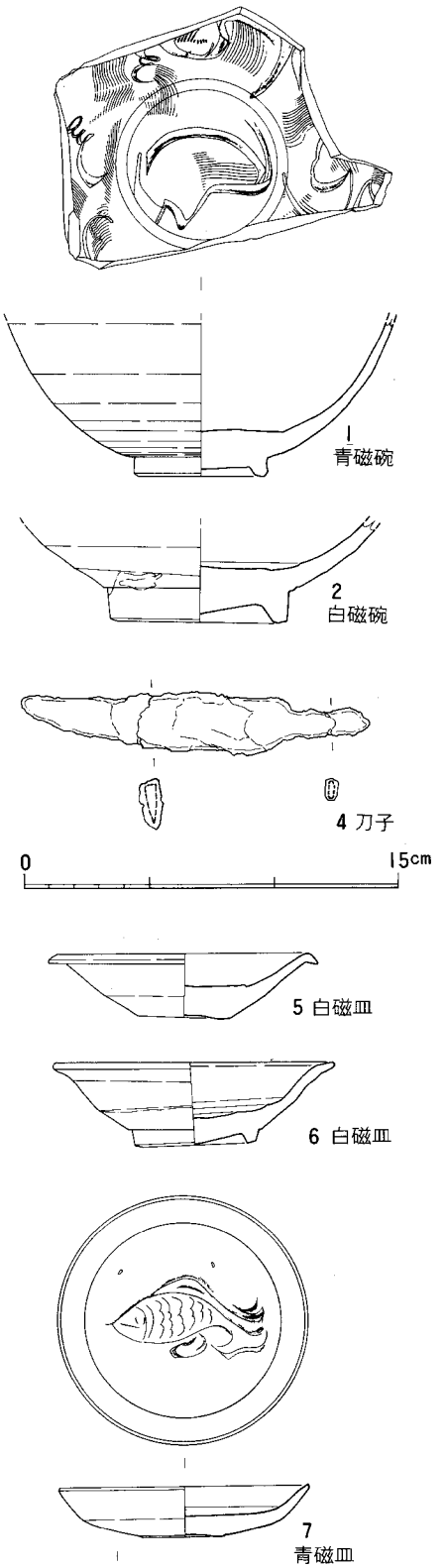


Fig. 17　1号土坑・29号土坑・Ｂ－２区１号ピット出土遺物(縮尺　1／3)

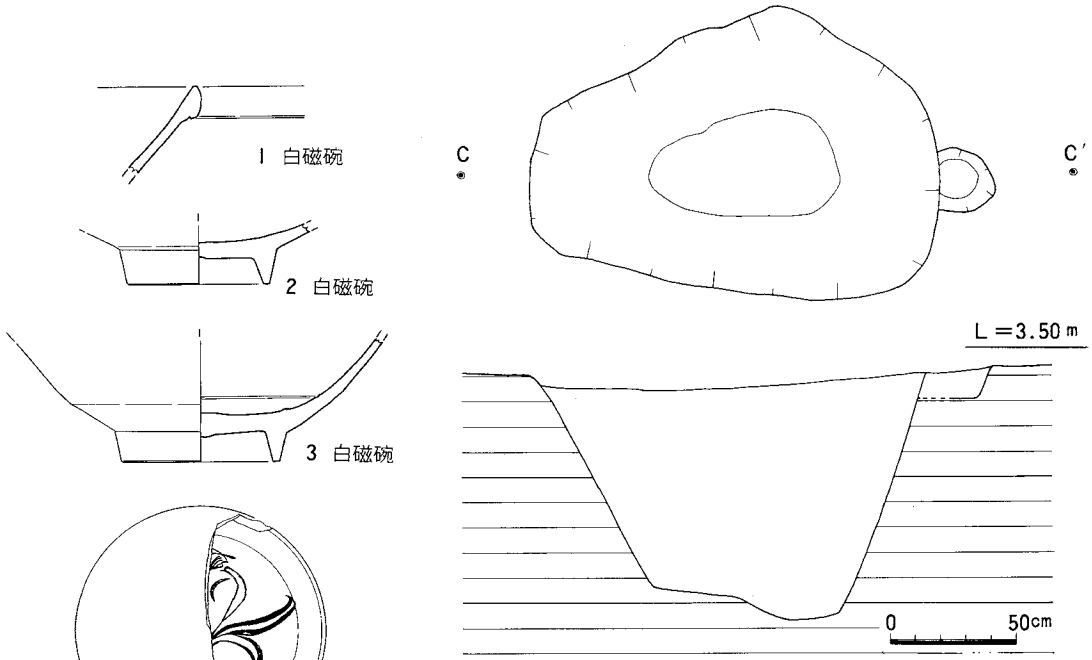


Fig. 18　Ｃ－２区土坑（Ｃ－２－ＳＰ－09）遺構実測図（縮尺　１／30）

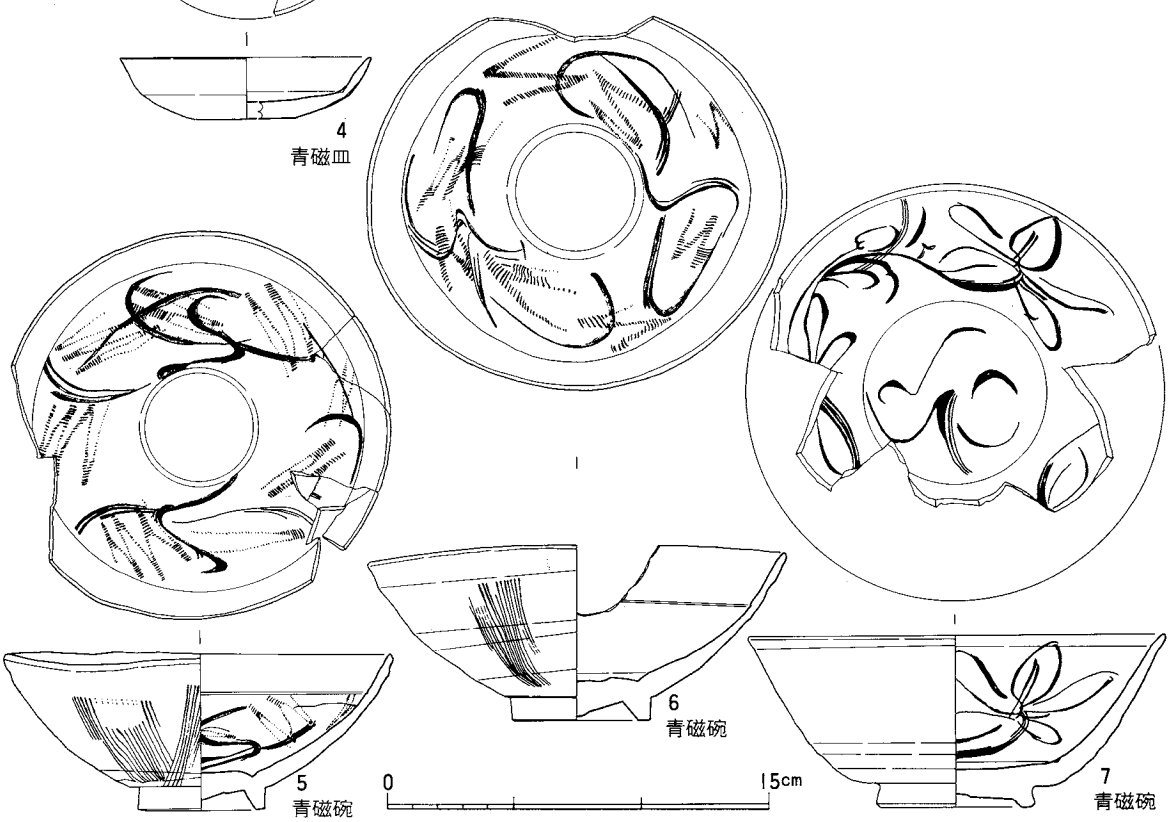


Fig. 19　Ｃ－２区土坑（Ｃ－２～ＳＰ－09）出土遺物実測図（縮尺　１／３）

C－2区土坑(C－2－SP－09)と出土遺物（Fig. 19）

同安窯や龍泉窯系の碗が、かなりまとまった破片で見つかったのがC－2区の土坑である。長軸を南北に1.6mをとる不整楕円形の土坑で、他に青磁皿(4)や玉縁の発達した白磁碗(1)などを共伴した。

5や6の碗は、歪みがかなりのものなので、当時、商品価置があったかどうかは疑問である。

墨書のある陶磁器（Fig. 20）

下に示した8点の陶磁器は、何れも白磁で、高台の外底部に墨書のある資料である。

2～5は、天地左右は断定できないが「|吉」と見える点で、同じものを表わしているのに違いない。6は花押で、8は「大」の字である。他は何と読めばよいか判らないが、古文書の心得のある方に御教示願えれば有難い。

とくに、160m²程度の狭い範囲の調査で、2～5が共通しているのは、単なる偶然ではなく、一緒に運ばれてきたが、あるいは31次調査区の周辺で使われていたことを傍証するのではないかと思う。

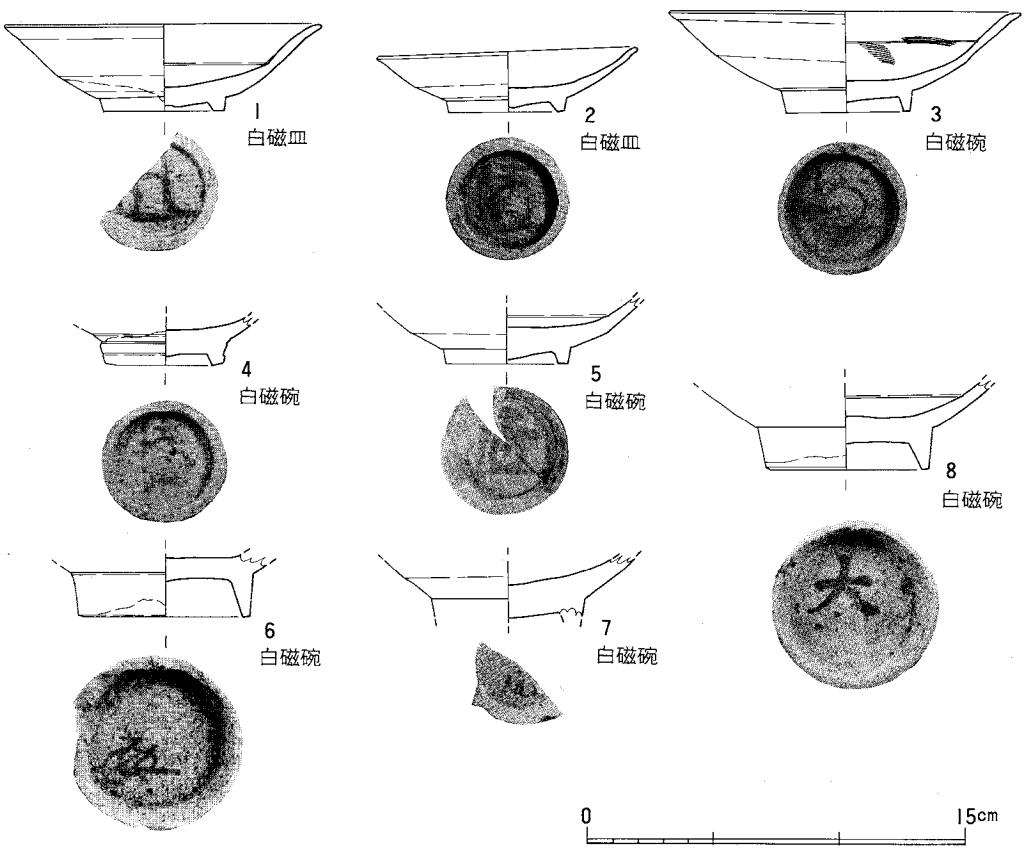


Fig. 20　博多遺跡群31次調査出土の墨書陶磁器(縮尺　1／3)

包含層出土の遺物（Fig. 21）

遺構掘り下げ時に見つかった遺物から、とくに目についたものについて図化した。

１は同安窯系の青磁碗、２の白磁碗は完形である。３はガラス製の丸玉で、４は５と同じように中央部に大孔、縁部に小孔を穿つ円板である。４の素材は表面が銀化しているのでガラスの可能性がある。５は白透明の玉で、何れも装飾に用いられたと思われる。７は縁に近い部分に４つの孔を穿つミニチュアの石鍋である。８は光沢のある暗茶色の釉を施した花盆で、口縁部に連続する指頭押圧文を加えている。９は茶灰色の釉を施し、内面に赤色顔料のみられる陶器の壺である。10の皿はくすんだ扶茶色の釉を付し、口縁部は茶色味を帯びている。天目碗11・12は、主体がこげ茶色、口縁部に乳灰色、その内外を暗緑灰色の釉が施されている。この２点は高台の削り出しがとても粗っぽい。

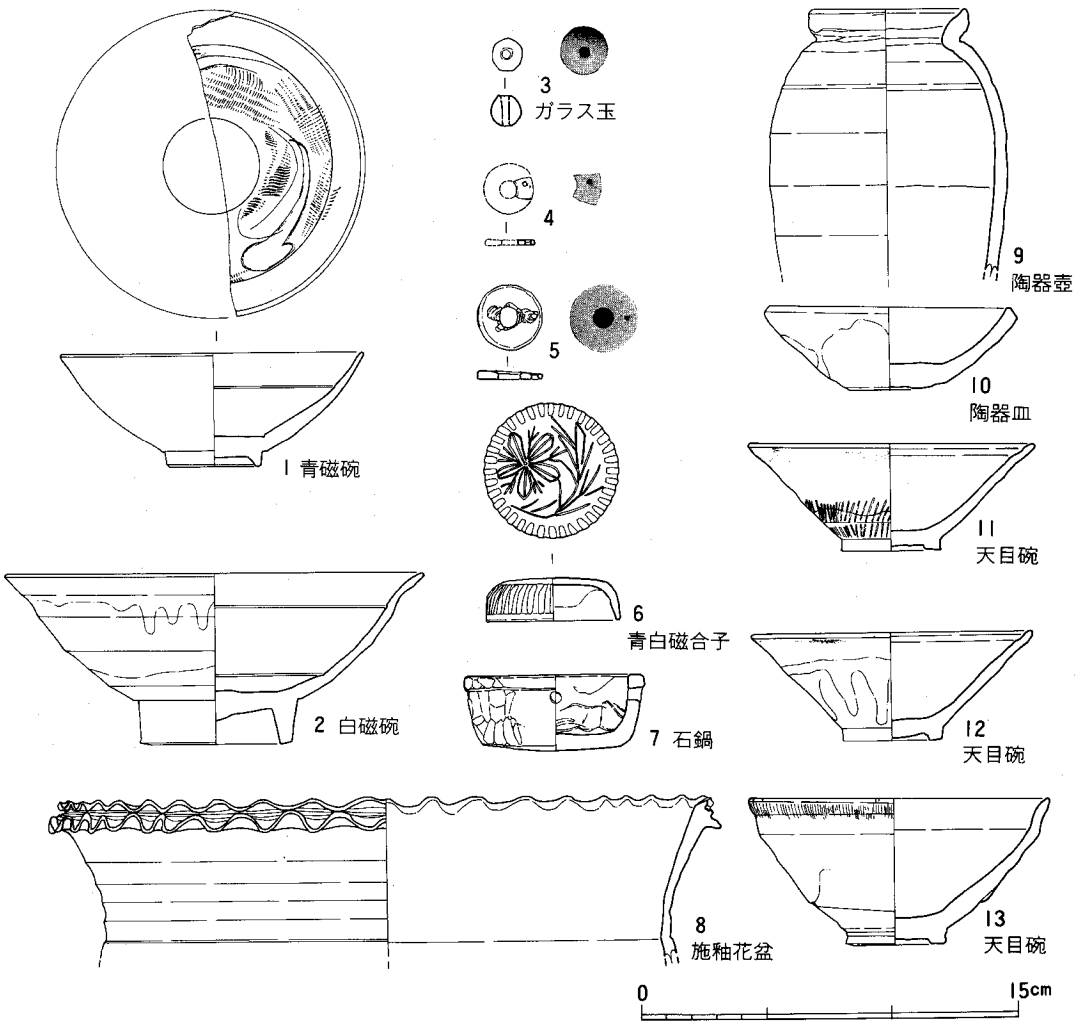


Fig. 21　博多遺跡群31次調査包含層出土遺物実測図（縮尺　1／3）

第４章　古墳時代の遺構と遺物など

31次調査区の東南部、約 1,800m²にわたる28次調査では、古墳の葺石の一部が数箇所で見つかり、それらをつなげたところ、後円部径40m程の前方後円墳が存在したことが明らかとなった。31次調査区では、これまでのデータから前方部の葺石にかかるのではないかとしていた。ところが推定線上に巨大なコンクリートの地下構造物に出くわし、一時は絶望的かとも思われたが、幸運にも西側に痕跡を止めていた。そこで28次調査の成果も含めて墳形復元を試みたところ、後円部は正円をなしていないようである。葺石中、最も残りが良いのは後円部の南側である。そして、その基底部(葺石の根石)のレベルは約 3.3m、後円部北側になると約 3.1m、前方部では約 3.4mである。今回の31次調査では 2.4mとなっており、28次調査に比べると約１m下ることになる。ここで基底面のレベルをもとに墳形の推定を行うと、後円部南の根石が最もしっかりしたつくりであることから、後円部北側では根石が抜かれた可能性もあると思う。また、28次調査区の前方部のレベルは後円部南側のレベルに近いので、前方部には本来、大きな根石が用いられていなかったのではないかという結論に達した。

従って、後円部北側と31次の前方部は、砂地のため多少外側にずれてしまったのかもしれない。

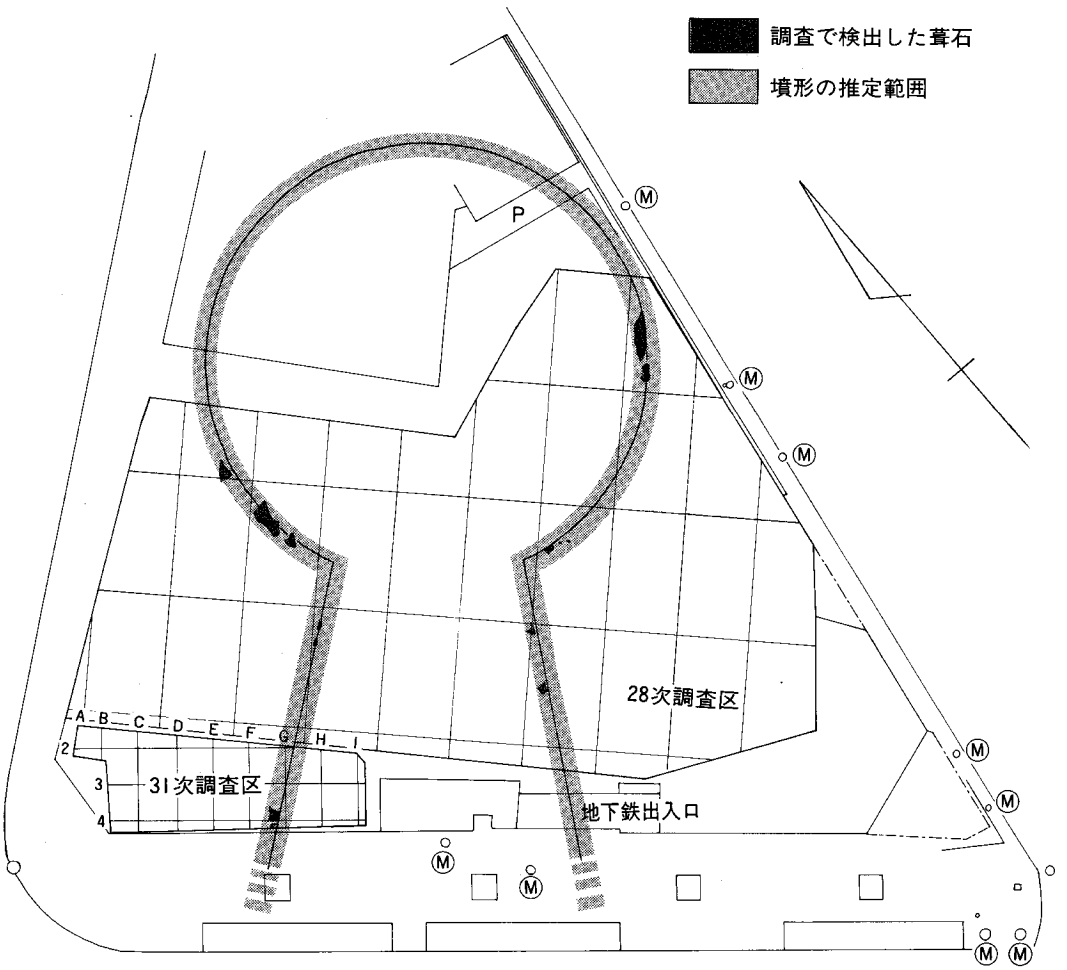


Fig. 22　博多１号墳復元案(縮尺 1／625)

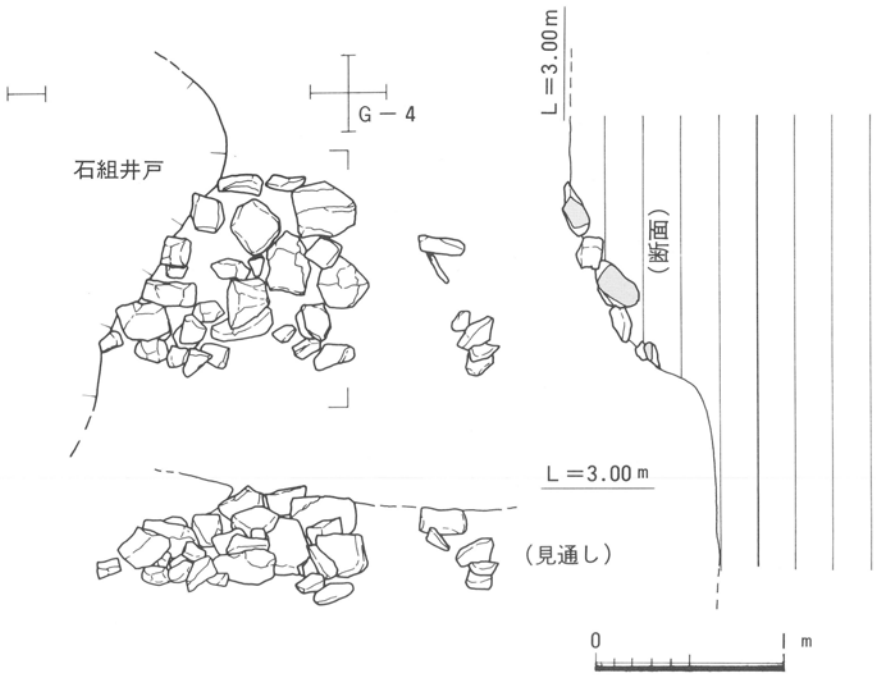


Fig. 23　前方部葺石実測図(縮尺　1／40)

Fig. 24　葺石全景(北より)

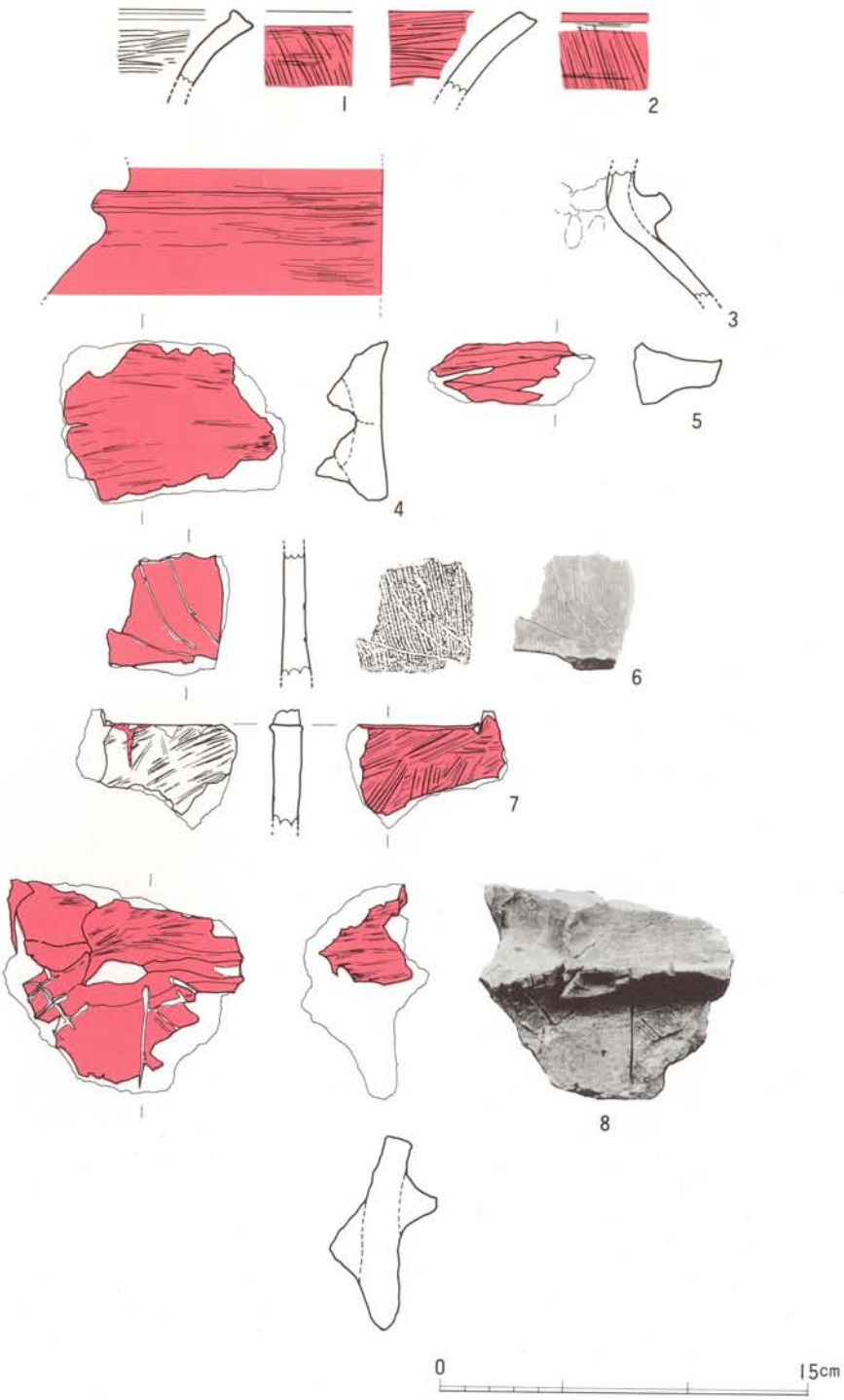


Fig. 25　31次調査出土の埴輪実測図〈1〉(縮尺　1／3)

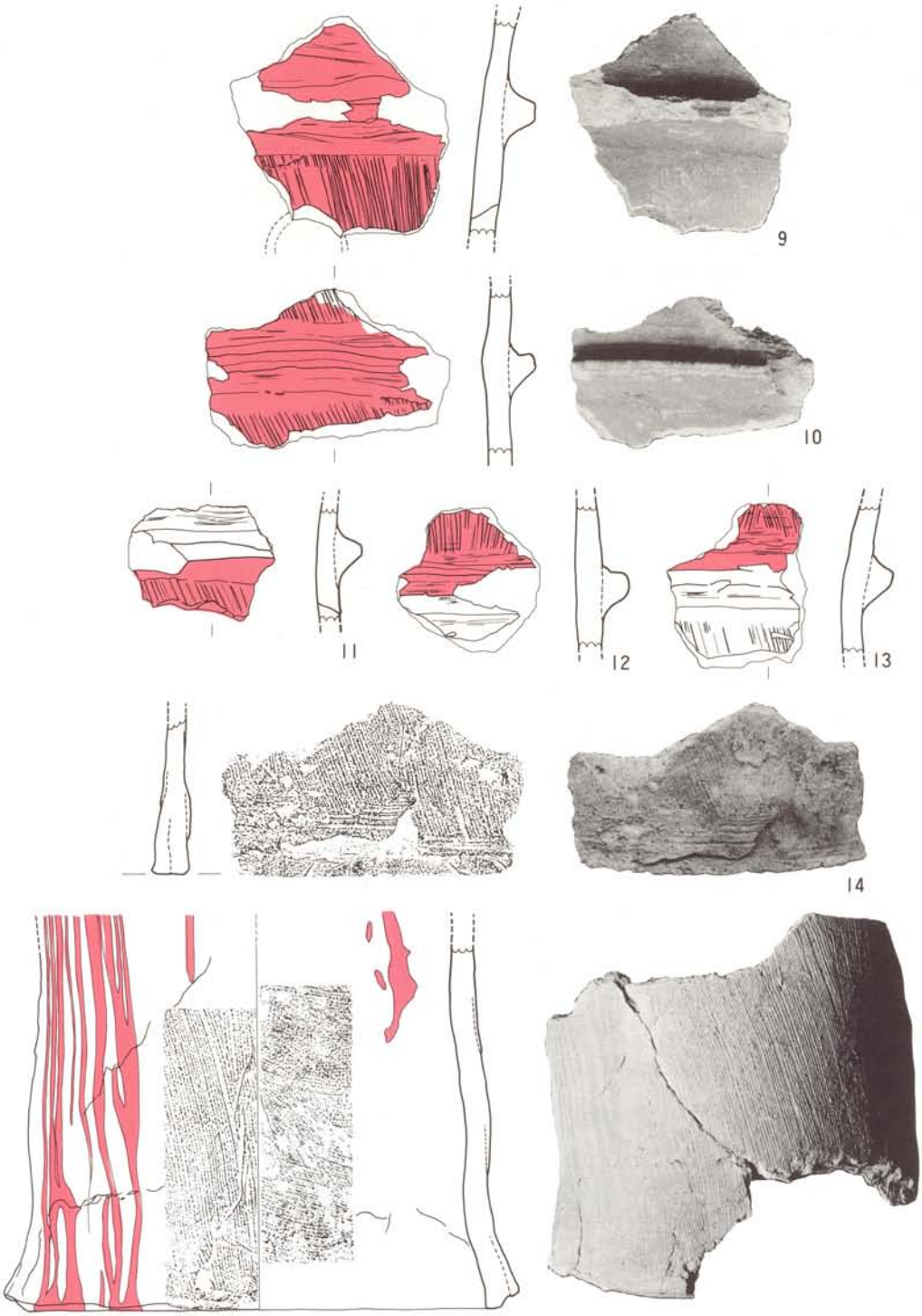


Fig. 26　31次調査出土の埴輪実測図〈２〉(縮尺　１／３)

埴輪（Fig. 25・26・27）

砂層面へ掘り下げの過程で、コンテナに１箱いっぱいの埴輪片が採集された。何れも原位置、原形を保っていなかったが、その中から選別の結果、18点を図示することになった。

１・２は、朝顔形埴輪の口縁部と思われる。内外に粗いハケ目調整を施した後、端部に指なでを加えている。３は、朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片である。頸部内面の接合部に指頭圧痕が見られる。

４～８は形象埴輪の破片である。４・５・７は、細かいハケ目調整があり、表面の調整は円筒埴輪などに比べると丁寧である。形象の種別は不明だが、家あるいは盾を形どったものかもしれない。６はハケ目の後、沈線を施しており、平らであることから、円筒形の破片ではないと思われる。７は、方形の透し、あるいは窓の一部にあたり、６と同様平らな面である。

８は、斜格子状の文様が刻されている面と、それに垂直関係にある面の一部をとどめていることから、形象埴輪の角の部分にあたると思われる。

９～13は、円筒あるいは朝顔形埴輪の突帯の一部である。また、９には円形の透しがある。断面図では、各々が上を向く傾向がうかがえるが、器面に塗付された赤色顔料の濃淡を判断の基準とした。すなわち、裾部に付着した顔料は、下に向かって垂れており、成品の上から下に

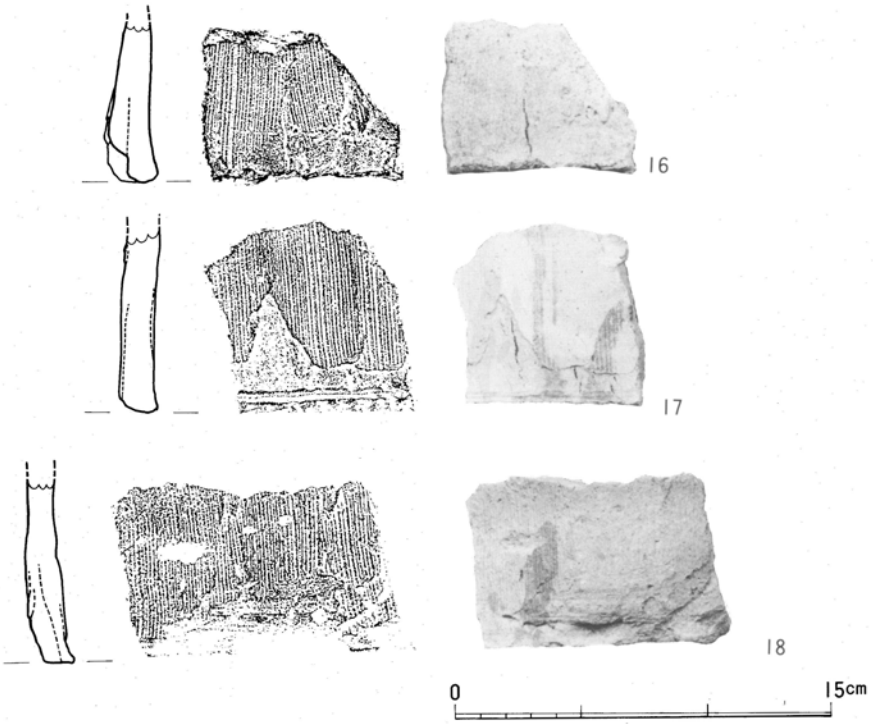


Fig. 27　31次調査出土の埴輪実測図〈３〉(縮尺　１／３)

向かって塗付し、土中に埋まる部分には顔料を塗らなかったようである。

14～18は、円筒、もしくは朝顔形埴輪の裾部の破片である。15を例にとると、内面に斜方向、外面に縦方向のハケ目調整を施している。裾端部は、ヘラ状工具によって切り離したままか、更に粗いハケ目を加えたものもみられる。

古墳の損壊が著しく、墓に伴う土器が、28次と今回の調査を通して検出できなかったことは残念だったが、中世の町に埋もれていた前方後円墳を発見できたことは、調査の大きな成果といえよう。

集石（Fig 28）

人為的な遺構かどうかは判らないが、拳大から一抱えほどの礫が集中した個所が数ヶ所で見つかった。ここではその中、まとまりの良かった二ヶ所について述べたい。

集石ＤとＥは、黄色砂層中にある不定形な礫群で、遺物は一切伴わない。石材は不明であるが、淡褐色の火成岩系に属するのではないかと思う。

時期を決定できるデータはないが、集石Ｄが、12世紀の町割りに関連する３号溝に切られていることから、それ以前に寄せられた可能性がつよい。また葺石に用いられている石材と異なるとは言いきれないので、もし葺石の残骸だとすると、古墳の崩壊が、平安末にはある程度すすんでいたことになる。

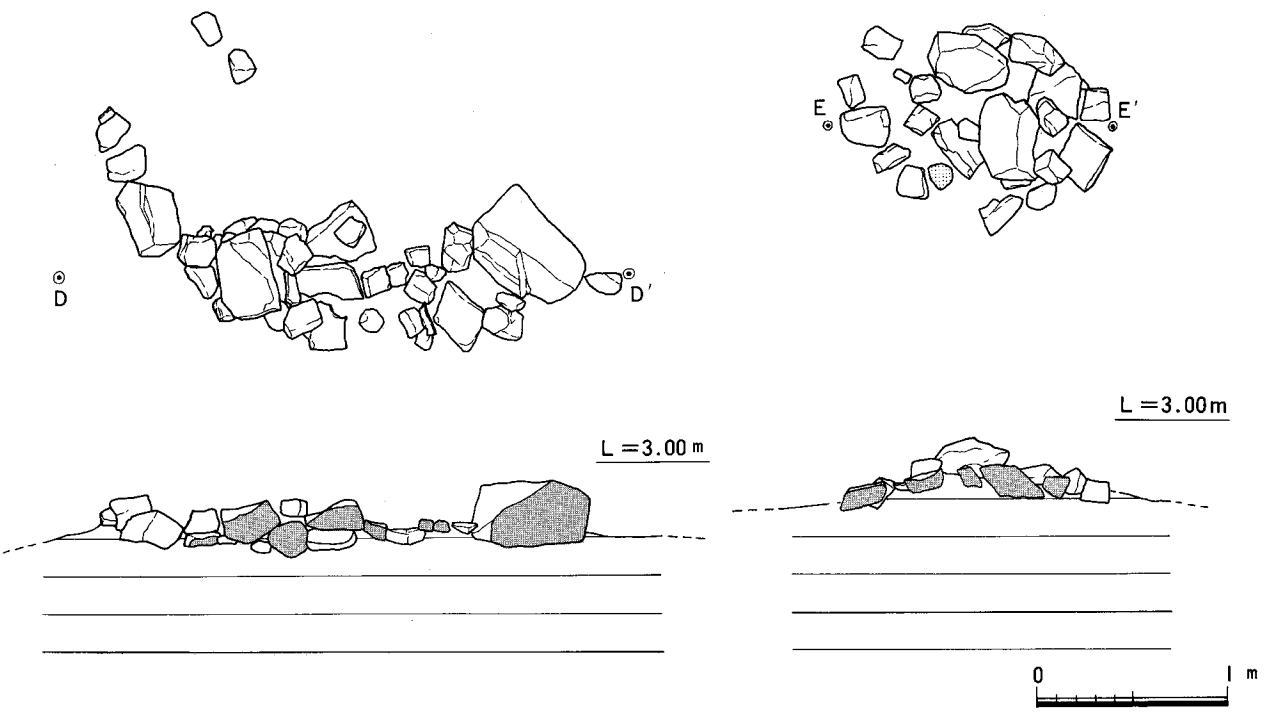


Fig. 28　集石遺構実測図Ｄ・Ｅ（縮尺　1／40）

第5章　結　　語

博多遺跡群は、湾に臨む福岡平野の北に位置している。この地区は、今日の福岡市博多区にあたり、古代・中世にかけて栄えていたことはよく知られている。

1986年度に緊急調査した、御供所町の一区画が31次調査区である。この地点は、前年に発掘を行った28次調査区に隣接しており、その際、前方後円墳の葺石の一部が見つかったことから、その延長を確認するため、埋蔵文化財の調査が実施されることになった。

調査区の南東部には、大きな地下構造物があったが、古墳の葺石はその痕跡を止めていた。その他にも、井戸や溝、土坑など、古代から中世にかけての遺構も発見された。とくに3号溝の方位はほぼ真北にあたり、博多の町割りの変遷を考えるうえで注目される。これまでの博多の研究によって、12世紀と16、17世紀の三段階にわたる町割りが明らかとなった。今回の3号溝は、ほぼ12世紀の町割りの方位に相当することになる。

この報告書では、さらに博多の旧地形の復元を試みた。現在の等高線を参考にしたものだが、18世紀以後にできた古地図との共通点や相違点も幾つか浮かび上がってきた。

今回の調査で見つかった最も古い遺物は、弥生土器の甕の底部で、中期中頃にあたる。(Fig. 29－1)また、古代の遺物では、奈良時代から平安時代にかけての製塩土器の破片(Fig. 29－2)も出土している。

最後に博多遺跡群のこれからの調査で重視しなくてはならない点について考えてみたい。まず、これまで地表面から、ある程度の深さまで掘り下げ、中世の遺構面から調査を行うケースが多いわけだが、町割りの変遷を厳密に捉える場合、明治時代や少なくとも江戸時代の後期の面から調査対象に入れるべきではないかと思う。しかもそれには、遺構の方位や標高に一層気をつかう必要があるのではないだろうか。少なくとも、標高移動の手薄や調査区の座標点を把握し、報告書に記載するよう努めることは、隣接地の調査が頻繁となった現状では必須条件である。

ともかく、5月から7月にかけての二ヵ月余りの調査は、山笠の熱気に包まれながら、無事終了し、まもなく博多の街は本格的な夏を迎えた。

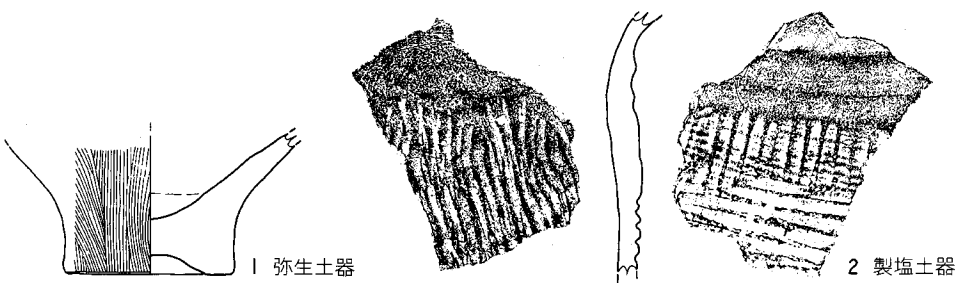


Fig. 29　31次調査出土の弥生土器と製塩土器(縮尺 1／3)

Fig. 17～4

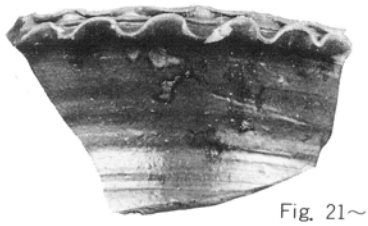


Fig. 21～8

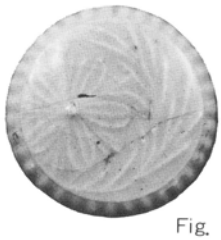


Fig. 21～6

Fig. 21～11

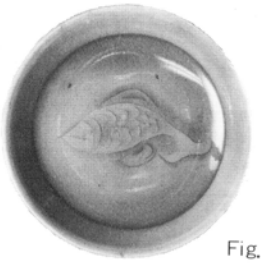


Fig. 17～3

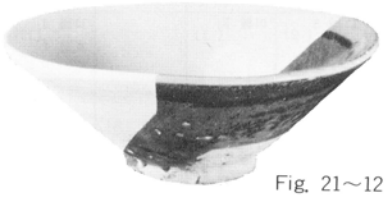


Fig. 21～12

Fig. 19～6

Fig. 21～2

Fig. 30　31次調査出土遺物(縮尺 約1／3、Fig. 21～6は 約1／2)

遺構と遺物一覧

狭い面積の調査だったとはいえ、本文中に紹介した遺物は、全体の一部である。遺物には、現在は注目されていなくても、将来、研究の進展によって書き加えられるべき一片があると思う。以下の表に一覧を記したので、必要な方は、埋文センターで収蔵コンテナを探っていただきたい。ＳＫは土坑、ＳＤは溝、ＳＰは柱穴状土拡の略号である。ＳＰの上段に示したのは、グリット名となっている。また、各欄の（　）内の数字は破片の総数である。

分類／遺構	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
ＳＫ－１	口縁10 底部 2 (30)			口縁 9 底部 4 (32)	口縁 3 (3)			口縁 8 底部 2 (41) ※捏鉢 ※黄釉盤	口縁26 底部20 (75)	瓦器 須恵器
ＳＫ－３	口縁32 底部 4 (66)	口縁 1 (1)		口縁 5 (18)	口縁 1 底部 1 (3)			口縁 3 (28) ※捏鉢 ※水注	口縁37 底部42 (110) ※内黒　1	須恵器 瓦 銅銭
ＳＫ－４ 掘りかた	口縁 3 底部 2 (10)	口縁 1 (1)		口縁 7 底部 1 (17)			碗　1 合子　1 不明　1	口縁 2 (14) ※壺	口縁 8 底部12 (25)	土師器 須恵器
ＳＫ－５	口縁 2 底部 3 (6)	口縁 1 (1)		口縁 4 底部 2 (8)	口縁 2 (2)		合子　1 碗　2	口縁 1 (9)	口縁 9 底部13 (26)	瓦器 土師器
ＳＫ－６	口縁 1 底部 2 (5)			口縁 2 (7)			合子　3	口縁 1 底部 1 (11)	口縁 4 底部10 (19)	瓦
ＳＫ－７	口縁 2 底部 1 (9)			口縁 3 底部 2 (7)	口縁 1 (1)		碗　1	口縁 1 (11)	口縁 4 底部 6 (16)	瓦
ＳＫ－８	口縁 2 (9)			口縁 1 (11)	口縁 1 底部 1 (2)			口縁 2 底部 4 (17) ※黄釉盤 ※壺	口縁12 底部 8 (24)	瓦
ＳＫ－９	口縁 4 (5)			口縁 1 (5)			合子　1 皿　1	(20)	口縁 2 底部 4 (6)	
ＳＫ－10	口縁 3 底部 1 (2)	口縁 1 (1)		口縁 3 底部 4 (12)	口縁 1 (1)		合子　1	口縁 1 (10) ※皿	口縁 2 底部 5 (7)	瓦 須恵器
ＳＫ－11	口縁13 底部 4 (29)					1	碗　1	口縁 1 底部 2 (19) ※皿	口縁11 底部16 (40)	瓦器 須恵器 瓦
ＳＫ－12	口縁 7 (15)	口縁 2 底部 1 (3)	耳　1	口縁 7 底部 1 (19)			合子　1 碗　5	口縁 1 (24) ※水注口 ※黄釉盤	口縁13 底部27 (43)	瓦器 須恵器 瓦
ＳＫ－13	口縁 2 (3)			口縁 2 (5)				(2)	口縁 1 (5)	
ＳＫ－14	口縁 3 底部 2 (12)	口縁 1 (1)	壺　1	口縁 2 底部 2 (9)	口縁 2 (2)			口縁 1 底部 1 (9) ※壺 ※黄釉盤	底部 3 (3)	瓦 銅器片
ＳＫ－15	(1)			(2)				(3)	口縁 3 底部 5 (20)	須恵器
ＳＫ－16	口縁 4 底部 3 (13)	口縁 2 底部 1 (3)	四耳壺 1	口縁13 (25)	口縁 2 底部 1 (2)		合子　2	口縁 4 底部 3 (34) ※黄釉盤 ※壺 ※捏鉢	口縁43 底部40 (137)	銅銭片 須恵器 瓦器 瓦
ＳＫ－17	口縁 9 (18)	口縁 2 (2)	壺　3	口縁11 底部 2 (33)	口縁 2 (2)		碗　2	口縁 1 (17) ※捏鉢 ※四耳壺	口縁 7 底部10 (22)	埴輪 瓦 須恵器
ＳＫ－18	口縁 3 底部 3 (10)	口縁 2 底部 1 (3)		底部 2 (5)	底部 1 (1)	鉢？　4 （口縁２） 壺（口縁１）	不明　1	口縁 2 底部 1 (8) ※鉢　2	口縁17 底部13 (30)	埴輪 石鍋 瓦

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
SK−19	口縁 8 底部 4 (19)	口縁 1 (1)		口縁 3 (14)	口縁 1 (1)	不明 1	碗 1	口縁 3 (13)	口縁75 底部76 (191)	瓦 須恵器
SK−20	口縁 6 底部 1 (15)	口縁 1 (1)	壺 1 水注取手 1	口縁 1 底部 1 (4)	口縁 3 (3)		合子 1	口縁 1 (5) ※甕		須恵器 瓦 土錘
SK−21	口縁 4 (11)	口縁 1 (1)		口縁 1 (1)				口縁 2 (11)	口縁 5 底部19 (24) ※内黒 1	銅銭
SK−22	口縁 7 (13)	口縁 2 (2)	染付 1	口縁10 底部 1 (14)	口縁 1 (1)			口縁 3 底部 3 (18) ※甕 ※黄釉盤	口縁 5 底部14 (19)	
SK−23	口縁 1 (3)		染付 1	口縁 1 底部 1 (6)	底部 2 (2)			4	口縁 2 底部 7 (9)	瓦
SK−24	口縁 5 (7)	口縁 1 (1)		口縁 1 (3)	口縁 2 底部 1 (3)			口縁 1 (17) ※大甕 ※捏鉢	口縁 5 底部10 (18)	瓦 土師器
SK−25	口縁 2 (2)		染付 2	口縁 4 (5)				口縁 1 (10)	口縁 1 底部 1 (4)	七厘片
SK−26	口縁14 底部 2 (25)		不明 1 壺 3 水注口 1	口縁 7 (12)			碗 1	口縁 3 底部 1 (25) ※黄釉盤	口縁17 底部15 (34)	瓦 瓦器 土師器 須恵器
SK−27	口縁34 底部 5 (78)	口縁 4 底部 2 (11)	壺 4 水注口 1	口縁15 底部 3 (22)	口縁 1 底部 1 (2)	壺 2		口縁 8 底部 4 (54) ※四耳壺 ※水注口 ※天目 ※甕 ※壺	口縁42 底部42 (111)	瓦質土器 土師器 須恵器 瓦 埴輪
SK−28	口縁 8 底部 4 (19)	底部 1 (1)		口縁 2 (9)	底部 3 (3)			口縁 1 底部 2 (16) ※壺 ※捏鉢	口縁 3 底部 5 (8)	
SK−29	口縁 7 底部 1 (15)			口縁 1 (1)				口縁 1 (9) ※捏鉢 ※黄釉盤	口縁12 底部 9 (28)	瓦 須恵器
SK−30	口縁11 底部 2 (18)			口縁 3 (13)	口縁 1 底部 2 (3)			口縁 6 底部 1 (33) ※四耳壺 ※壺	口縁15 底部12 (30)	瓦
SK−31	口縁10 (18)	口縁 4 (4)		口縁10 底部 3 (20) (墨 1)	口縁 4 (6)	2	口縁15 底部 3 (28) (碗)	口縁 1 (20) ※黄釉盤	口縁11 底部14 (32)	瓦 須恵器
SK−32	口縁 9 底部 2 (24)	口縁 5 (6)		口縁 2 (6)	底部 1 (2)	1	合子 1	口縁 3 (10) ※黄釉盤	口縁11 底部12 (27)	瓦 須恵器
SK−33	口縁 5 底部 4 (15)	口縁 2 底部 1 (3)		口縁 2 (4)	口縁 1 (1)			口縁 7 (7)	口縁 8 底部 3 (11)	瓦 瓦器 須恵質土器
SK−34	口縁25 底部 4 (49)	口縁 3 底部 1 (4)	四耳壺 1	口縁 3 底部 2 (11)	口縁 3 底部 1 (5)		口縁 1 (3)	口縁 3 底部 2 (22)	口縁10 底部 4 (26)	須恵器 瓦器 瓦
SK−35	口縁14 底部 2 (21)	口縁 1 (1)		口縁 1 (2)	口縁 1 底部 1 (2)			口縁 2 (14) ※黄釉盤	口縁 9 底部23 (47)	須恵器 瓦 瓦器 土師器
SK−36	口縁32 底部 5 (74)	口縁 9 底部 3 (15)	水注 1	口縁16 (28)	口縁 8 底部 5 (13)		口縁 3 (5) (碗) 合子 4	口縁 5 底部 2 (59) ※黄釉盤 ※水注 ※捏鉢 ※四耳壺	口縁59 底部76 (204)	土師器 須恵器 瓦器 瓦
SK−37	口縁 5 (13)	口縁 4 底部 1 (5)		口縁 3 (3)			合子 1	口縁 3 底部 1 (12) ※黄釉盤	口縁 6 底部15 (31)	瓦 須恵器 瓦器

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
SK−38	口縁 7 底部 1 (10)			口縁 5 (6)	口縁 2 底部 1 (3)			口縁 3 底部 1 (12) ※黄釉盤 ※捏鉢	口縁 7 底部12 (27)	瓦器
SK−39	口縁20 (48)	口縁 1 底部 1 (4)		口縁 5 (8)				口縁 4 底部 2 (31) ※捏鉢 ※黄釉盤	口縁28 底部46 (103)	瓦 須恵器 土師器 瓦器
SK−40	口縁10 (19)		四耳壺 1	口縁 2 (8)			口縁 1 (2)	(15) ※水注	口縁15 底部23 (45)	須恵器 瓦
SK−41	(1)			口縁 2 (4)				(11)	口縁 4 底部 3 (10)	瓦
SK−42	口縁 3 (6)	(1)		口縁 2 (4)	口縁 1 (1)			(4)	口縁 4 底部15 (19)	瓦器
SK−43	口縁16 底部 5 (41)	口縁 4 (4)	不明 1 染付 4 壺 1	口縁21 底部 3 (52)	口縁 6 底部 3 (9)	不明 2 口縁 1	合子 4 碗 3 口縁 2	口縁13 底部 2 (122) ※壺 ※甕 ※黄釉盤 ※捏鉢 ※碗 ※四耳壺	口縁45 底部61 (174) ※内黒 1	水注 埴輪 瓦器 土師器 瓦 須恵器
SK−44	口縁45 底部 1 (90)	口縁 4 底部 1 (5)	壺 1 不明 1 染付 1	口縁15 底部 6 (51)	口縁 3 底部 1 (4)		合子 1 皿 1	口縁 5 底部 5 (64) ※捏鉢 ※黄釉盤 ※甕 ※褐釉陶器壺？ ※壺	口縁35 底部44 (114) ※内黒 2	瓦器 須恵器 土師器 瓦 骨
SK−45	口縁19 底部 6 (54)	口縁 1 (1)		口縁24 底部 4 (56)	口縁 7 底部 1 (8)	水注？2	合子 1	口縁14 底部 5 (76) ※捏鉢 ※大甕 ※四耳壺 ※黄釉盤 ※天目	口縁40 底部43 (142)	須恵器 土師器 瓦 銅銭
SK−46	口縁14 (50)	口縁 2 底部 1 (3)		口縁 2 底部 2 (6)			底部 1 (2)	口縁 4 底部 1 (30) ※黄釉盤 ※四耳壺 ※擂鉢	口縁18 底部19 (71)	瓦 須恵器 土師器
SK−47	口縁13 底部 1 (35)		合子 2 染付 1	口縁13 底部 2 (37)	口縁 2 底部 1 (3)	1	碗 6 口縁 3 底部 1 皿 2 合子 2	口縁 7 底部 4 (60) ※黄釉盤 ※捏鉢 ※大甕 ※壺	口縁38 底部38 (132)	土師器 弥生 須恵器 石鍋(加工品) 瓦
SK−48	口縁 6 底部 2 (13)	口縁 1 (1)	四耳壺 4	口縁 4 底部 1 (18)	底部 2 (2)	1	碗 2 口縁 1	口縁 4 底部 1 (20) ※黄釉盤 ※捏鉢 ※壺 ※鉢	口縁11 底部 8 (27)	瓦 須恵器 土師器
SK−49	口縁 5 底部 2 (13)	口縁 1 (1)	壺 2	口縁 7 底部 1 (9)		1		口縁 1 底部 2 (5) ※黄釉盤	口縁 1 底部 5 (6)	須恵器 瓦
SK−50	口縁25 底部 4 (52)	口縁 3 (4)		口縁 2 (8)			口縁 1 (2)	口縁 6 (26) ※黄釉盤 ※捏鉢 ※壺 ※大甕 ※天目	口縁12 底部30 (53)	瓦器 須恵器 瓦
SK−51	口縁19 底部 3 (32)	口縁 1 (1)	四耳壺 1 水注？2 染付 3	口縁 1 (5)	口縁 1 (1)			口縁 3 底部 1 (16)	口縁 8 底部13 (30)	貨幣 須恵器 瓦 瓦器 土師器

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
SK—52	口縁 5 底部 1 (9)		不明 1				碗 1 口縁 1	口縁 1 (11)	口縁 4 底部10 (14)	須恵器
SK—53	口縁40 (148) 底部28	口縁 1 底部 1 (2)	染付 2	口縁 3 底部 1 (5)	底部 2 (2)	1 水注 3 (or壺)	合子 3	口縁 2 (2)	口縁12 底部40 (135)	須恵器 土師器
SK—54	口縁63 (141) 底部10	口縁 3 底部 2 (5)	四耳壺 4 口縁 1 水注 1	口縁 6 底部 1 (14)	口縁 2 (2)		口縁 1 (2)	口縁 9 底部 7 (74) ※黄釉盤 ※捏鉢 ※天目 ※壺	口縁57 底部63 (285)	瓦器 須恵器 瓦 弥生 土師器
SK—55										
SK—56	口縁 2 底部 1 (12)			口縁 3 (7)			合子 2	口縁 1 (7) ※捏鉢	口縁 1 底部 2 (3)	瓦 石鏃
SK—57	口縁 1 (3)							口縁 3 (3) ※黄釉盤	口縁 1 底部 1 (2)	須恵器
SK—58	口縁 9 底部 7 (23)	口縁 3 (3)		口縁 2 (2)				口縁 2 (14) ※碗 ※壺	口縁13 底部23 (36)	須恵器 瓦 瓦器 骨
SK—59	口縁 6 底部 2 (18)	(2) 底部 2	合子 1 不明 1	口縁19 (27)	口縁 2 (2)		皿 1 底部 1	口縁 9 底部 2 (31) ※捏鉢 ※壺 ※盤	口縁18 底部14 (56)	須恵器 瓦器 瓦 埴輪
SK—60	口縁 3 底部 2 (8)	口縁 1 (1)		口縁 4 底部 1 (10)	口縁 2 (2)		合子 1	口縁 3 (31) ※捏鉢	口縁12 底部13 (33)	埴輪 須恵器
SK—61	口縁 1 底部 1 (5)			口縁 5 (8)				口縁 1 底部 1 (41)	口縁12 底部11 (23)	中世雑器 土師器
SK—62	口縁 2 底部 1 (5)				口縁 1 (1)			口縁 1 (3)	口縁 5 底部 4 (13)	中世雑器 瓦
SK—63	口縁 5 (9)	口縁 1 (1)		口縁 2 底部 2 (5)				口縁 3 (10) ※天目 ※捏鉢	口縁 6 底部 8 (23)	須恵器 埴輪 中世雑器 土師器 ガラス
SK—64	口縁 1 底部 1 (5)	口縁 1 (1)	染付 1	口縁 1 (1)				(2)	口縁 3 底部 6 (11)	瓦器 須恵器 中世雑器 瓦
SK—65 石組井戸	口縁17 底部 4 (30)	口縁 2 底部 2 (4)	染付 4	口縁18 底部 3 (32)	口縁 5 (7)	壺 2	合子 1 碗 1	口縁 4 底部 2 (46) ※水注取っ手	口縁 4 底部 7 (11)	埴輪 瓦 中世雑器 須恵器 擂鉢 羽釜 土師器
SK—65 掘方	口縁 2 (3)			口縁 2 (3)				底部 1 (3)		
SK—65 石組井戸内										瓦
SK—66				口縁 2 底部 1 (3)						
SK—67	口縁 8 底部 2 (16)			口縁 2 (3)				口縁 1 (5) ※捏鉢	口縁15 底部18 (50) ※内黒 1	埴輪 近世雑器 骨 瓦 須恵器
SK—67 井筒内	口縁 2 (3)								口縁 1 底部 1 (5) ※内黒 1	

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
SD－1	口縁 5 底部 2 (19)	口縁 1 (1)		口縁10 (12)			合子 4 碗 2	口縁 2 (29) ※壺	口縁 8 底部15 (32)	
SD－2	口縁 5 底部 1 (17)			口縁 3 (8)	口縁 1 (1)		合子 1	口縁 3 (15) ※四耳壺の耳	口縁18 底部24 (94)	埴輪 瓦 須恵器 ※高坏
SD－3	口縁 2 (4)			口縁 1 (1)				口縁 1 (1)	口縁 3 底部 2 (8)	土錘 須恵器 瓦 土師器

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
A－1 SP－1	口縁 6 底部 1 (13)			口縁 1 底部 1 (2)				口縁 5 底部 2 (14) ※四耳壺 ※捏鉢	口縁10 底部16 (27) ※内黒土器	貝 須恵器
〃 SP－2	口縁 8 (15)		ふた 1	口縁 3 底部 1 (4)	口縁 1 (1)		合子 1	口縁 1 底部 1 (26)	口縁 4 底部 5 (15)	瓦
〃 SP－3									底部 1 (1)	
〃 SP－4	口縁 4 底部 2 (7)							口縁 1 底部 2 (6) ※捏鉢	口縁 2 底部 1 (3)	
〃 SP－5	底部 1 (4)			口縁 2 (3)	底部 1 (1)			口縁 1 底部 1 (9)	口縁36 底部31 (80)	
〃 SP－6	口縁 1 (2)			口縁 1 (1)			碗 1	口縁 1 (6) ※四耳壺	口縁 2 底部 4 (9)	瓦
〃 SP－7	底部 1 (4)				口縁 1 底部 1 (2)			口縁 2 (4)	口縁 2 底部 6 (11)	
〃 SP－8									口縁 1 底部 2 (3)	瓦器 土師器(碗)
A－2 SP－1	口縁 1 (2)		水注 1 口縁 1 不明 1	(2)				口縁 1 (2) ※捏鉢	口縁 1 底部 1 (3)	瓦
〃 SP－2									口縁 1 底部 2 (7)	
〃 SP－3	口縁 1 底部 1 (4)							(2)	口縁 3 底部 5 (18)	土師器
〃 SP－4	口縁 2 (3)			口縁 2 (4)				(3) 底部 1 ※壺	口縁 3 底部 2 (10)	土師器 須恵器
B－1 SP－1				口縁 1 (1)				口縁 1 (3)	口縁 2 底部 1 (3)	
〃 SP－2								(1)	底部 1 (1)	
〃 SP－3	(1)								底部 4 (4)	瓦
〃 SP－4	(2)							(1)		
〃 SP－5				(1)					底部 2 (2)	
B－2 SP－1	口縁 5 (5)	口縁 1 (1)	合子 1	(2)				口縁 2 (22) ※取っ手 ※壺	底部 1 (1)	
〃 SP－2	口縁 1 (2)	底部 1 (1)	染付 1	口縁 2 (3)				口縁 1 (11) ※捏鉢 ※擂鉢	底部 1 (1)	
〃 SP－3	(1)			口縁 2 底部 1 (4)			碗 1	(2)	口縁 2 底部 5 (8)	瓦
〃 SP－4	口縁 3 (4)		壺 1				合子 1 碗 1 皿 1	口縁 1 (5)	口縁 1 底部 3 (4)	瓦

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
B－2 SP－5										
〃 SP－6	(1)			(1)					口縁 1 底部 2 (3)	須恵器
〃 SP－7								(1)	(3)	瓦 土師器
〃 SP－8				(1)						土師器 須恵器
〃 SP－9								口縁 1 (1)	口縁 2 底部 3 (5)	
〃 SP－10								口縁 1 (1) ※捏鉢	口縁 1 (2)	須恵器
〃 SP－11	口縁 1 底部 1 (2)	口縁 1 (1)		口縁 2 (2)	底部 1 (1)			(1) ※褐釉壺	口縁 1 底部 4 (6)	土師器 須恵器
B－3 SP－1	口縁 6 底部 1 (12)		壺 1	口縁 1 (2)	底部 1 (1)			口縁 1 底部 2 (9) ※大甕	口縁 4 底部 8 (13)	瓦
〃 SP－2								(1)	底部 1 (1)	
〃 SP－3	口縁 1 (1)			口縁 1 (2)				(3) ※壺	底部 3 (4)	土師器 瓦
〃 SP－4	(2)		合子 1		口縁 2 (2)			(2)	底部 5 (7)	瓦
〃 SP－5	(1)	口縁 1 (1)			口縁 1 (1)					
B－4 SP－1								底部 1 (2)	底部 1 (2)	
C－1 SP－1								底部 1 (1)		埴輪
〃 SP－2	口縁 5 底部 1 (6)			口縁 1 (1)				(6)	口縁 4 (5)	現代のタイル 須恵器 土師器
C－2 SP－1				口縁 1 (1)				口縁 1 (2) ※壺		
〃 SP－2	口縁 1 (5)							(2)	口縁 1 底部 9 (10)	
〃 SP－3					口縁 1 (1)					土師器
〃 SP－4										土師器片
〃 SP－5										
〃 SP－6	(1)							(2)	底部 2 (2)	
〃 SP－7	口縁11 底部 3 (35)			口縁 7 (11)	口縁 2 (2)		2	口縁 1 底部 2 (13)	口縁11 底部12 (38)	瓦
〃 SP－8			染付 1						口縁 1 底部 1 (2)	
〃 SP－9	口縁14 底部 3 (35)	口縁 1 底部 1 (2)		口縁11 (23)	底部 1 (1)		合子 3	口縁 9 底部 4 (61) ※黄釉盤 ※壺	口縁26 底部46 (89)	瓦 銅銭
〃 SP－10									(1)	
〃 SP－11								(1)	口縁 1 底部 2 (3)	須恵器
〃 SP－12										土師器
〃 SP－13								(1)	口縁 1 (5)	土師器
C－3 SP－1		口縁 1 (1)			底部 1 (1)			(1)	口縁 1 (1)	
〃 SP－2		底部 1 (1)		口縁 1 (2)				(1) ※壺		須恵器

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
C－3 SP－3	口縁 1 (1)								底部 1 (2)	須恵器
〃 SP－4	口縁 2 (3)							口縁 1 (2)	(1)	
〃 SP－5									口縁 2 底部 2 (4)	
〃 SP－6								口縁 1 底部 1 (3)		須恵器
C－4 SP－1									口縁 3 (3)	
D－1 SP－1	口縁 2 (5)								底部 1 (1)	須恵器系陶器
D－2 SP－1	口縁 5 (8)			口縁 1 (1)				(1)	口縁 2 底部 3 (7)	土師器
〃 SP－2	口縁 1 (1)			(1)						
〃 SP－3					口縁 1 (1)				(2)	石鍋
〃 SP－4										土師器片
〃 SP－5								(2)		土師器(甕)
〃 SP－6									(1)	
〃 SP－7	底部 1 (1)								底部 3 (3)	須恵器
〃 SP－8	口縁 1 (1)							(1)	口縁 1 (2)	
〃 SP－9								口縁 1 (1)		
D－3 SP－1	口縁 1 (5)			口縁 4 (6)				(4)	口縁 3 底部 7 (11)	須恵器 土師器
〃 SP－2	口縁 2 (2)			口縁 4 (6)					口縁 2 (3)	銅銭
〃 SP－3	口縁 1 (1)			口縁 1 (1)					口縁 1 底部 2 (3)	
〃 SP－4	口縁 1 (2)		小壺 1	口縁 1 (1)					口縁 1 底部 1 (2)	
〃 SP－5	(7)			口縁 1 (1)				(3)	口縁 3 底部 2 (8)	
D－4 SP－1	口縁 2 (2)			(1)				(2)	口縁 2 底部 3 (5)	
E－2 SP－1	口縁 4 底部 1 (14)			口縁 3 (5)	口縁 2 (2)			口縁 1 (5)	口縁 6 底部12 (27)	瓦
〃 SP－2	口縁 2 底部 1 (3)	口縁 1 (1)						口縁 1 (8)	口縁 2 底部 4 (7)	
〃 SP－3	口縁 1 (9)			口縁 1 (3)				口縁 2 (9) ※天目 ※印花文付片	口縁 1 底部 9 (13)	
〃 SP－4	口縁 2 (4)							口縁 1 (1)	口縁 1 底部 6 (7)	瓦器
〃 SP－5	口縁 1 (3)	口縁 1 (1)						(3) 底部 1 ※黄釉盤	口縁 3 底部 4 (7)	瓦
〃 SP－6									底部 2 (2)	
〃 SP－7				口縁 1 底部 1 (2)					口縁 1 底部 1 (2)	
〃 SP－8										
E－3 SP－1	口縁 2 (2)			口縁 2 (4)				(1)	口縁 1 (4)	
〃 SP－2	口縁 1 (1)			口縁 1 (4)	底部 1 (1)			口縁 1 (3) ※捏鉢	口縁 3 底部 5 (9)	
〃 SP－3								(3)	底部 2 (2)	須恵器

遺構＼分類	白磁			青磁			青白磁	陶器	土師器	その他
	碗	皿	その他	碗	皿	その他			坏・皿	
E－3 SP－4	口縁 4 底部 2 (9)		合子 1		底部 1 (1)			(1)	口縁 3 底部 9 (13)	瓦器 瓦
〃 SP－5	口縁 2 (6)	口縁 2 (2)		口縁 1 (1)				(4)	口縁 4 底部 4 (11)	
〃 SP－6	口縁 1 底部 1 (2)							(1)	口縁 2 底部 4 (6)	
〃 SP－7	口縁 1 底部 1 (2)		1		底部 1 (1)			(2)	底部 4 (4)	須恵器 ガラス
〃 SP－8								(1)	口縁 1 (1)	
〃 SP－9	口縁 2 (3)			口縁 1 (2)					口縁 1 底部 6 (9)	
〃 SP－10	(2)			口縁 1 (1)				(1)	(1)	瓦 現代のタイル
〃 SP－11										
〃 〃 SP－12										瓦 須恵器 土師器
E－4 SP－1	口縁 1 (4)	底部 1 (1)	壺 2					(4)	口縁 2 底部 2 (4)	瓦
〃 SP－2									底部 1 (1)	
〃 SP－3										
〃 SP－4										
F－3 SP－1	口縁 1 (2)			(1)				(1)	底部 1 (1)	土師器
〃 SP－2									底部 2 (2)	須恵器
〃 SP－3										瓦
F－4 SP－1									(1)	
〃 SP－2									(1)	
G－3 SP－1			さかづき？ 杯 1	口縁 1 (1)	底部 1 (1)			口縁 1 (1) ※捏鉢	口縁 2 (3)	瓦片
〃 SP－2								(1)		
〃 SP－3	(1)								口縁 1 (3)	
〃 SP－4										瓦片
〃 SP－5										
G－4 SP－1				口縁 1 (1)						土師器
H－3 SP－1										
〃 SP－2								口縁 1 (1) ※天目		
〃 SP－3										須恵器
〃 SP－4										焼石
I－3 SP－1	底部 1 (1)			(1)						
I－4 SP－1	口縁 1 (1)									

Summary

Hakata (博多) Sites are located in the northside of Fukuoka Plain that faces Hakata Bay.

This province belongs to Hakata district of Fukuoka City, and has been known for prosperity in the Middle Ages.

We designate one of the areas for rescue archaeology during the 1986 campaign "the 31st point of Hakata Sites."

A year before, at the neighboring point we found remains of stone walls built for a burial mound (博多1号墳), so one of the object was to confirm the extension of them.

Though the space of excavation was small, we could find remains of stone walls in the *Kofun* period.

Besides it, there were many structures; wells, ditches and holes. Considering the ages of trading ceramics and usual wares, they are dated to Japanese medieval period. Above all the direction of No.3 ditch was almost true north. By studies on archaeological survey in Hakata, we came to understand there were three stages of city planning. And they can be seen in the direction of roads or ditches.

The example of this site is about true of the case in the twelfth century.

In this report, we made another attempt to restore old topographies in Hakata refering to modern contour lines. Although the result is not always the same with old maps, those were drawn after the 18th century, it surely contributes to geographical work on the Middle Age harbor town, we confirm.

博 多 X

福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集

1987年３月31日

発 行 福 岡 市 教 育 委 員 会

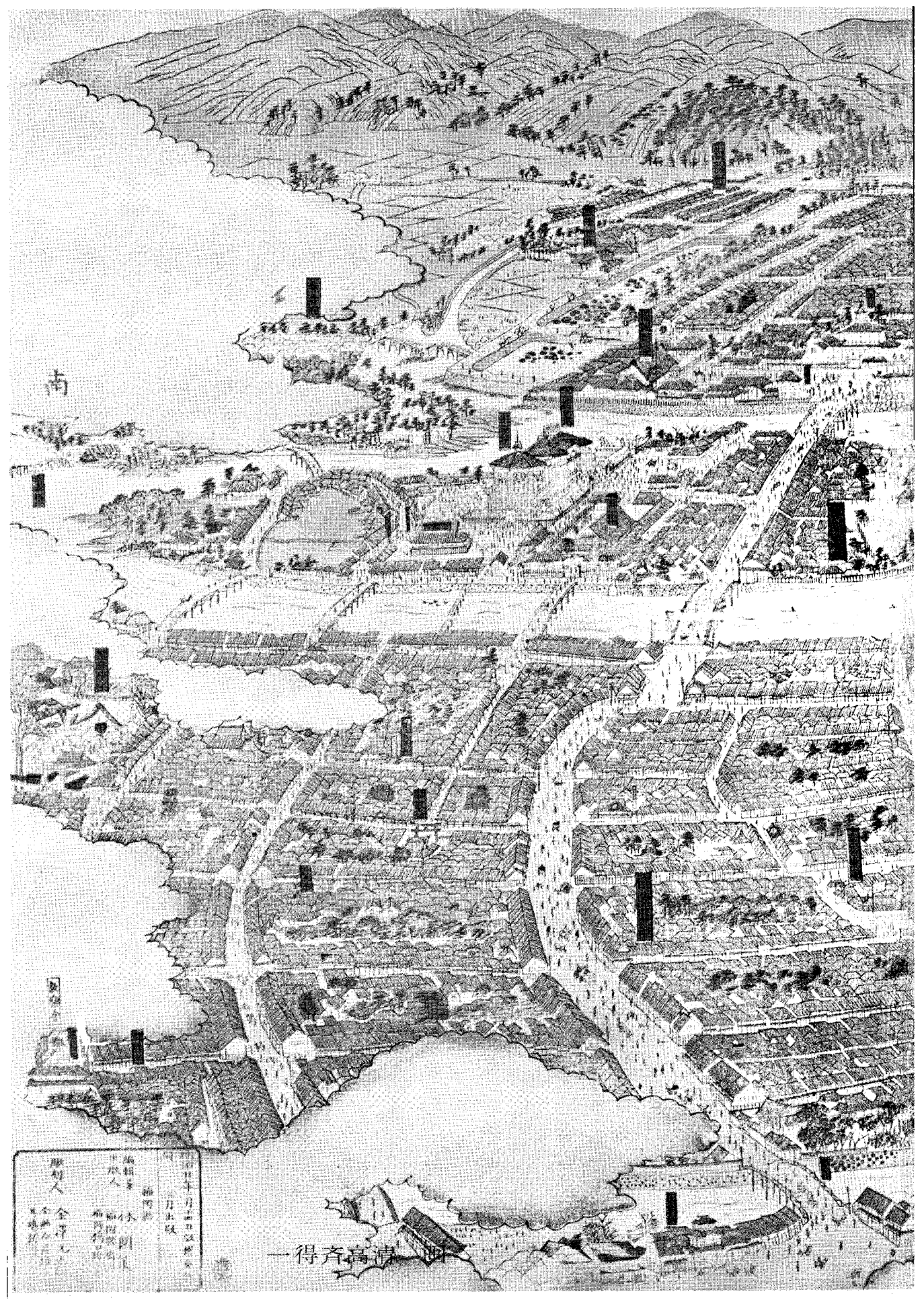
福岡市中央区大名２丁目10－29

ＴＥＬ（092）711－4667

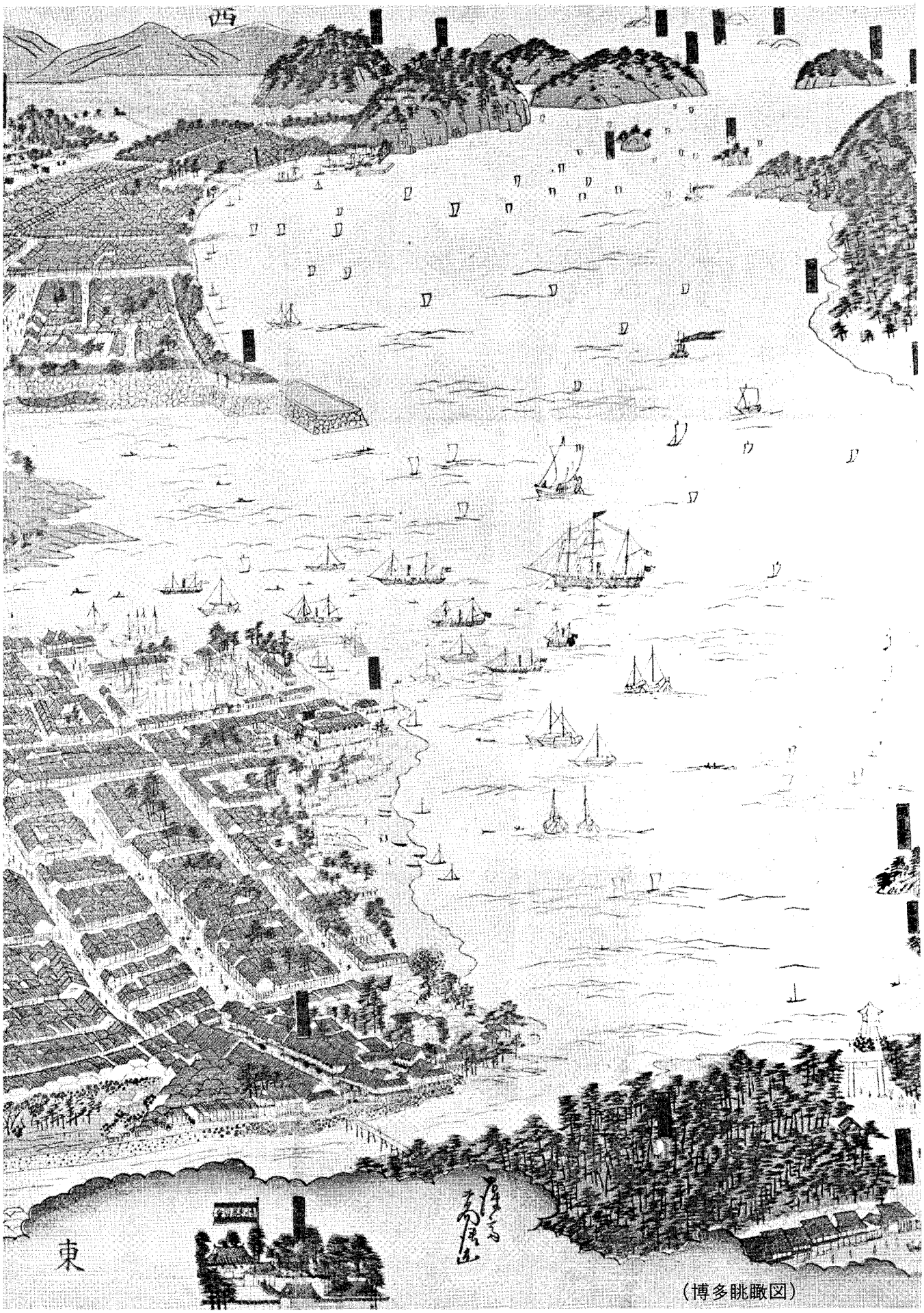
印 刷 正 光 印 刷 株 式 会 社

福岡市西区徳永８７７－１

ＴＥＬ（092）806－5708



一得斉高津



（博多眺瞰図）

The genral report on the 31th survey of Hakata Sites

1987 Mar.

by

Fukuoka City Board of Education